

求道



第四卷

第二號



求道第四卷第貳號目次

求道

◎信仰之極致

感謝

◎まことの心◎如來の加威力◎遠く宿縁を慶べ◎佛縁を結べ

講話

◎驕慢と弊と懈怠

告白

◎明來暗去

教誨

◎教誨自誠一、佛を除きて餘は能く救ふこと無けん

講義

◎歎異鈔一第三章

歎咏

◎瑤絡(短歌)

左千夫

◎清涼光(長詩)

紹介

甲之

◎小池十種◎靈海新潮◎人生の要路◎自信錄

時報

◎安中佛教青年會◎横須賀求道會◎傳道日割◎他山の石◎求道學會求道會講話題等

感想

◎和國教主聖德皇

近角常觀

每日曜午前九時

求道學舍

(本郷森川町一番地)

每土曜午後二時

第一求道會

(九段坂佛教俱樂部)

每月二日午後六時

第二求道會

(日本橋堀込町説教所)

求道

第四卷 第貳號

信仰之極致

信仰はひたすら御佛を信じ奉ることなり、而して御佛に遇ひたてまつれば忽ち一念に信樂開發して、ひたすらに喜ひたてまつるの外なき也。されば世の中には是程に安きこと又もあるまじ、されどあまりに安くして却て、人信じがたく、あまりに尊くして凡夫の眼に映じがたし。我信仰の生活に入りてより十年、常に大悲を仰ぎながら、其過ぎし徑路を顧みれば實に無量の味あり、特に聖人の教に對して我身の淺見を以て局分するが爲に分かりがたきことのみ多かりき。今過去の回顧を描きて世の信仰を辿る人々に其極致を示さむかな。

我初めて信仰の味を覺えしは大なる苦悶の後、佛陀は慈悲の塊なり、我こそ罪惡の塊也、この罪惡の我を惠みたまふは佛陀にてましますと、心の底より融け合ふて嬉しき目覺めたる心地なりき、信仰は實驗なりとは、此信念を示さんためなりき。世は罪の我と我を惠みたまふ御佛の外なきなり、我の外

講話

に他人を見、佛の外に世界の見ゆる人は心したまふべし。この御佛の閃めきが暗の心に差し込みたる心地こそ光明攝取の味なれ、其當時の心裏を回顧するに唯々佛は慈悲の塊なり、佛は慈悲ばかりなり、寧ろ慈悲が塊りて佛となれるなりとも謂ふべき感謝の念のみなりき、この外に信心もなく、念佛もなく、聖教もなく、唯胸中に溢るゝは感謝と慚愧のみなりき。

我此御佛の外に何物もなし、此御佛を信ぜざるの世は憫むべきかな、御佛なき人生はことごとく虚妄なり、唯御佛の力を仰ぎて慈直に進みゆくに、ゆく所として御佛の力のあらはれぬところなし、げに御佛は人生の力なりと知りぬ。人にして此力を信ぜずしては人生危し、國にして此力を信ぜずば國家危し、社會にして此力を信ぜずば秩序危し、御佛を信ぜざるもの強健なるものは亂暴に流れ、柔軟なるものは謫佞に陥る、唯仰ぐべきは佛力なるかな、世に佛力在さば人生到る所として通ぜざることなきを確信しぬ。

實に佛陀は人生の力なりけり、吾人人生にありて常に佛陀の冥祐を蒙る。人生の歸趣は佛天の御はからひなり、世に喜ぶべきあるも悲むべきあるも皆佛陀冥々の間に吾人を指導したまふ所、唯佛陀を信じたてまつれば人生の風波高しと雖決

して深はさるゝ所なし。『大聖をのゝもろともに、凡愚底下のつみひとを、逆悪もらさぬ誓願に、方便引入せしめけり』人生百般の出来事は皆罪深き我等の上に惠深き御佛の心を知らせんが爲なり、しかも其味は御佛の恵みが知られたると同時に一分一厘も疑ふの餘地なきなり、こゝに至りて佛の惠の外に世界はなきに至るなり、嗚呼廣大なる御佛の心なるかな。南無阿彌陀佛の名號は此御佛の御名なり、大慈父の名號也。されど我等此名號を稱ふるは決して徒らに空しく親を呼ぶの聲にあらず、世の道を求めたまふの人、心したまふべし。今や一世は信仰を求むるの聲響さ渡りぬ、されど應へられたるは少かりき。我等は決して石童丸の刈萱を求むるの夫れの如きにはあらず、今の人佛を求むるや孤兒の親を求むるの聲に似たり、其聲切實にして喉より血の迸るが如き心地して聞く者をして腸を斷つゝの想あらしむ。されど之に應へらるゝことなし、抑、是れ何故なるか。

南無阿彌陀佛は孤兒の親を求むるの聲にあらず、悲母の孤兒を求め給ふ御聲也。聖人曰く歸命と言ふは本願召喚の勅命也、實に南無阿彌陀佛は親を見捨て、迷へる窮子に向て我は實に汝の親也、汝は實に我子也と呼びたまふ御聲也、吾人此御

耳にするも此御心を知らず何の詮もなし、此御心を聞かば誰か御名を稱へざるべき。『彌陀の誓願不思議にたすけられて、往生を遂ぐるなりと信じて、念佛さうさんとねもひたつゝ、

ろのねこるとき、すなはち攝取不捨の利益にあづけしめたまふなり』親鸞聖人一代の教化は唯此親心を知らせんが爲なりけり、此如來の御恩を知らせんが爲なりけり。此御恵に向ては誰か自己の罪深きを氣附かざるべき、世の人は自己の罪人なるを知らず、唯善惡是非の沙汰のみして日を送る。我久遠劫來此恵みに負さしより、口言ふ所、身行ふ所一として罪ならざるはなし、而して罪人は其罪を悟らず恬として憚つる所なし。若し如來の願心によりて呼び醒さるゝにあらざれば、いかてか慚愧の心の起るべき。我こそ罪惡深重煩惱熾盛のものなれ、この罪の塊なる我を恵みたまふ御親こそ慈悲の塊の御佛なれ、仰ぐところは如來の願心、喜ぶ所は回向の信樂、聖人曰く、『夫れ以みれば信樂を獲得すること

とは如來選擇の願心より發起し、眞心を開闡することは大聖矜哀の善巧より顯彰せり、願みれば曠劫已來、今生今日に至るまで人生種々の出来事は唯此御恵にすゝめ入れんがためなりき、此願海に引入せんが爲なりき、』本願海のうちに、智

聲を聞く豈信心歡喜せざるべけんや、嗚呼ありがたき南無阿彌陀佛なるかな、嗚呼懐かしき南無阿彌陀佛なるかな。『我彌陀は名を以て物を攝したまふ、是を以て耳に聞き、口に誦するに無邊の聖德識心に攬入す、』我初めて久遠劫來此御聲に接するを得たり。嗚呼大慈に負き奉りしことの久しかりき、我親を求むると思ひしは誤なりき、名利を求むるにてありき、安逸を求むるにてありき、かくの如き憍慢懈怠の我を捨てたまはずして追ひ求めたまふ悲母の御心こそありがたき。此母の願心は一朝一夕のことにあらず。我等親の御聲をきく母の御心を開く、豈謙敬奉行せざるべけんや。

此悲母の願心こそ即ち彌陀の本願なり、聖人宣はく本願とは佛の御約束也と。嗚呼如來の我等を求めたまふ心こそ實に胸も裂け腸を斷つ心地ぞする、『彌陀の五劫思惟の願をよく案ずれば、ひとへに親鸞一人がためなりけり、されば、そこばくの業をもちける身にてありけるをたすけんとおぼし

恐のなみこそなかりけれ、弘誓のふねにのりぬれば、大悲のかぜにまかせたり、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。

寶月王光菩薩いはく「提婆達多はこれ佛の宿怨なり、如來の便を覺めたり。佛のたまはく「善男子よ、もし提婆達多善智識なくんば、人は終に如來の無量の功徳を具有せるを知る能はず、善男子よ、提婆は、これ善智識なり、我と勝を争ひ、現に怨家となり、如來の無量の功徳を願はずを得たり。何を以てのゆゑに、善男子よ、提婆達多は、宮内におりて阿闍王に語りて、故らに護財象王を放ちて、如來を害せんとしぬ。善男子よ、如來は象を見て、すなはちこれを調伏したまふ。爾の時無量無邊の衆生は、象の調伏を見て、奇特の心を生ず、すなはち正信を生じて、三寶に歸依し、三寶を願はしたればなり。善男子よ、かくの如き事は、提婆はこれ善智識なり、久來隨逐して、怨家を示現すと知るべし。而して諸の愚人は、實の如く之を取りて、斯の如き言を作す「提婆はこれ佛を害せんとするもの、これ怨家なり」と。善男子よ、乃至過去五百世中に於て、提婆はこれ善智識なり。怨家の事を示せり、悉く之れ示現して、諸の菩薩を願はし及び如來の無量の功徳を願はず。而して諸の愚人は、實の如くこれを取り「提婆は佛を害せんとするもの、これ怨家なり」といふ。善男子よ、提婆は善く無量の功徳を修し、善く善根を修し、諸佛に親近して徳本を宿植し、心大乘に向ひ、大乘に順向し、大乘の彼岸に向ひ、阿耨多羅三藐三菩提に近づきぬ。善男子よ、諸の衆生は、偏に惡を起し、心を壞るの因縁を以て、三惡道に墮するなり。

感謝

まことのこゝろ

罪を犯せるの人、心の底より罪深きことを懺悔して、御佛の恵みを喜びたいへぬ。前かた、本を貸しつるゆへに、いかなる本にてありしかと尋ねしに、「はじかき」といふ本なりといふ。我かくの如き本を貸したる覚えなし、考ふれば歎異鈔を貸したるにてありき。其初の頁に「はしがきありしをかく読み誤れるにてありき。次に「汝は善人なるか、悪人なるかと尋ねしに、我この頃初めて悪人となりたりと答へぬ。我は此人によりて親鸞聖人の御教を體現して示されぬ、聖人曰く、「よしあしの文字をもしらぬひとはみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりかほは、「ねほそらことのかたちなり、是非しらず邪正もわかぬこのみなり、小慈小悲もなければ、名利に人師をこのむなり、「嗚呼法をさく罪人はまことのこゝろにして法を説くの我は實に名利の人師也。」

ましますか、凡夫のはからふべきことならず、唯々廣大の佛智不思議を仰ぎ奉るべき也、法はことごとく如來の御物なり、一黒の私を挟むべからず、親鸞は弟子一人も持たず、皆如來の御弟子也、唯我も信じ、人にも教へ、ともに喜ぶ御同朋也、御同行也、唯仰ぎたてまつるべきは如來の御催也、如來の加威力也。

遠く宿縁を喜ぶ

聖人感謝して曰く「噫弘誓の強縁は多生にも値ひ難く、眞實の淨信は億劫にも獲難し、遇行信を獲は遠く宿縁を慶べ」と。

吾人幸に如來の慈光に遇へるもの多生曠劫の宿縁を感謝せずして可ならんや、故に此如來の慈光を宣傳したてまつるも一點の私を加ふべからず。予昨年夏四國中國に傳道す、偶大日本佛教青年會議習會東京に開かる、乃萬障を排して歸京し出席す、而して聽者少くして且つ盛ならず、私かに豫期に負く感なきに非ず。然れども予は知らざりしも小林翁其席に列し、大に法を喜び因縁熟して遂に一家信仰の光に浴せらる。告白欄に擧ぐるもの是也。此に於てや曩に予か講習會に於て

如來の加威力

一日東京監獄一被告人より葉書來る、曰く謹啓私事私書偽造行使詐欺取財の刑により宇都宮裁判所にて禁錮三ヶ月に處せられ去る十二月二十三日控訴傳遞相成、爾來高王白衣觀音經を千誦致し其折の數取に用ひし（信仰之餘瀝、是は前君の貸與を受けしもの）書籍を前讀誦終りて何げなく、徐に繙き讀拜讀仕候に實に意外の感に打たれ、是迄の懺悔と一種異りたる懺悔心を起し眞に佛陀靈光の難有事、筆に盡すことは言ふ迄もなく、口に申上げる事は出来ません、依而私は明日公判開廷候故、茲に罪惡の塊を逐一申上度と日夜念し居り申候、尙出獄早々御伺申、尊師の御芳顔を奉拜候早々敬白、嗚呼罪を宥めらるべく祈念せし經文は豈圖らんや罪を自覺せしむべき方便引入ならむとは、而して數取に用ゐられし書は如來の威力を加へたまふ御縁なりけり、聖人曰く「本尊聖教は衆生利益の方便なれば總じて流通物なり、たとひかの聖教を山野にすつといふとも、そのとろの有情群類蠢々のたぐひに至るまでかの聖教にすぐはれてことごとくその益をうべし、しからは衆生利益の本懐そのとき満足すべし」と。如何なる宿縁の

寂寞を感じたるは一種の妄念に過ぎざりしこと懺悔に堪へざる也、予此の如き場合鮮からず求道會に於て聞法入信したまひて告白懺悔したまひし人々皆、是れ種々の行路を経て宿縁の開發したまひし也、若し未見の人にして信仰之餘瀝懺悔録を繙きて同一の信海に入りたまへる御同朋の多くましますを思へば、唯説くもの、聞くもの一點の私を挟むべからず、唯、聖人の仰せの如く、遠く宿縁を喜びたてまつるべき也。

佛縁を結ぶ

聖人の一生は人をして廣大の佛縁を結びしむるに在り。曰く「唯佛恩の深きことを念ふて人倫の嘲を耻ぢず、若し斯書を見聞せん者は、信順を因となし、疑謗を縁とし、信樂を願力に彰はし、妙果を安養に顯はさん」と。聖人の眼中には唯佛恩あるのみ、瞬言も疑謗も皆大願海に誘引したまふの經過たらざるはなし。默せんよりは寧ろ謗れ、相關せずして過ぎんよりは寧ろ疑へ、謗るものは喜ぶべく、疑ふものは信すべし、聖人は一擧手一投足唯廣大の佛力を仰ぎたまへり、曰く「まれに人身をうけて生命をほろぼし、肉味を食することはなほだしかるべからざることなり、されば如來の制誡にもこ

のこと、ことにさかんなり、しかれども末法濁世の今時の衆生無戒のときなれば、たもつものもなく破するものもなし、これによりて剃髮染衣のそのすがた、たゞ世俗の群類にこゝろおなじきがゆへに、これを食すとて、食するほどならば、かの生類をして解脱せしむるやうにこそありたくさふらへ、しかるにわれ名字を釋氏にかるといへとも、こゝろ俗塵にそみて智もなく、徳もなし、なによりてかかの有情をすくふべきや、これによりて袈裟はこれ三世の諸佛解脱幢相の靈服なり、これを着用しながら、かれを食せば、袈裟の徳用をもて濟生利物の願念をや、はたすと存じて、これを著しながらかれを食するものなり、冥衆の照覽をあふきて人倫の所見をはからざるること、かつは無慚無愧のはなはだしきになり、しかれども、所存斯のごとしと云云(口傳鈔)聖人の一舉一動の微に至るまでみな如來の御恵みを仰ぎたまはざるなし、さればこそ聖人のおほせにいはく「某。(親鸞)閉眼せば賀茂河にいでて魚にあたふべし」と云云これすなはちこの肉身をかるんして佛法の信心を本とすべきよしをあらはしましたすゆへなり(改邪抄)噫如何なるところに佛縁のましますかは知るべからず。蠢々蠕動之類にいたるまで誰か十方衆生の呼聲に

講 話

僣慢と弊と懈怠

(求道學舎日曜講話) 近角 常觀

親鸞聖人が或は正信偈或は和讃或は教行信證等に於て、御經の文或は論釋等の文を縦横にひきぬいておしめし下されてある。其の御教化を常々拜見致します上に於て、だゞ何氣なく、此は何からひいてある、これは何經から引てあると、ついで粗末に讀むゆゑに、我れは其眞のありかたみにさづかずして見すむしてしまふ。

先日來私は本願方について度々おはなしいたしました。此本願方といふ文字も我れはつねに口になし、常に味ひながらもそれを左程にもはずして過して居つたのである。然しながら、一度彌陀の本願に氣がついてみると、實に本願といふは貴き文字であつた。

先づ佛の慈悲といふと春風にあふが如き暖かき心地を感じる、又佛の光明とさくと直ちに闇を照す光と感ずる、更に又南無阿彌陀佛とさくと是は又大慈悲の親の御名で、其一種々に云ふべからざるなつかしさを感ずるのであります。

そこで此本願とさくと如何かと云ふに、其佛の慈悲、光明、御名の根本たる親の親心を本願によりて知らせてもらふので

もれんや、唯、有縁の衆生とともに如來のみもとに生れんかな。聖人宣はく「安樂集に云く、眞言を探り集めて往益を助修せしむ、何んとなれば、前に生るゝ者は後を導き、後に生るゝ者は前を訪ひ、連網無窮にして願くは休止せざらしめんと欲す、無邊の生死海を盡さんが爲の故なり、爾れば末代の道俗仰て敬信すべき也、知るべし華嚴經の偈に云ふが如し、若し菩薩種々の行を修行するを見て、善不善の心を起すことありと雖菩薩は皆攝取す」と。

我ごときは戒定慧の三學の器にあらず、三學の外に我身に相應したる修行ありや、我心にたえたる法門ありやと、もろ／＼の學者をたづねる／＼の智者を訪ひしに、教ふる人もなく、示すともがらなし、なげき／＼なし／＼經藏に入りて、手づから開きみるに、善導和尚の觀經の疏に曰く、一心專念阿彌陀名號行住臥時節の久近を問はず、念々不捨者これを正定の業と名く、彼の佛願に順するが故に、誓て此生を畢るまで退轉あることなく、唯以淨土期とすと云ふ文を見得て後、予の如き無智の者は偏に此文を仰ぎ、専ら此理を憑て、念々不捨の稱名を執して決定往生の業因となすべし、たゞ善導の遺教を信するのみならず、又厚く彌陀の弘誓に順せり、彼佛の願に順するが故にの文神に染み心に留まるなり云々 (法然聖人)

あります。されば佛の佛たる所以を知らせていたゞくのです、實に佛の力強き、手強き、御心である、其佛心とは慈悲是なり、慈悲は親心、親心は即ち本願であります。抑も、如何なるか本願。經文の上に於て常に我々の見る如く、又他力の書物にあらはれてある通りである。即ち佛の我々にむかひ、大なるまこと、慈愛、廻向に心を以て、むかふて下さる。其切實なる佛の親心が本願であります。

全体佛とはどうか。まづ釋迦如來をはじめ一切の諸佛、すべて、迷をはなれ、悟に至り、醉の醒めたる不可思議の境である。そこで若し佛が其境の儘で、しつとして居られたなら、いかに尊くとも我々は其境に入るべき連絡がない。其故に其明らかなる境より、我々迷ひ苦しめるものを救はんとの切なる佛心より本願があらはれて下さるのです。必らずしも阿彌陀佛の本願とはいはず、一切佛の上には皆此願行があり、其願行に應ずる智慧があるので。既に佛學をなさつた方はしつて居られませう、佛の上には願心といふ點が最も貴いのです、其の願心が即ちめぐみであり、其めぐみは、大なる智慧をもつて成就するのであります。

通佛教に於ても釋尊の悟りを書くに常に普賢と文珠をいひます。普賢は即ち願心である、其願心を成就するのが文珠の智慧である。故に一切諸佛の願心は我々をめぐまんが爲の願心である、其願心を以て佛より我等に連絡をつけて下さるのです。人生上に於ても親はいろ／＼との經驗をなし、人生の苦樂を嘗め盡して其經驗したところを子に教ふるに何を以て導びいて下さるか、親の親心を以て導びくのであります。し

かるに我々は佛の本願ときけば、殊更になにか一種の命題、或は題目の如く考へるはいかにもことごとく、しい次第でありませぬ。佛が我々憐み無智なる衆生を御覽なさるときは、願心は自然に起らざるを得ない、一切の諸佛一佛として願心なき佛はまじきまじきのである。

かくして一切諸佛の願心は解つた。然らば阿彌陀佛の願心は如何、阿彌陀佛とは一切諸佛の根本本佛である。其阿彌陀佛の願心ゆゑ、所謂佛の願心といふものゝ上に於て、此上もない願心であります。如何にも佛の境は華嚴經の説の如く廣大にして高い、しかし其佛の境界を我々に届けて下さる心が即ち阿彌陀佛の願心の親心である。其切實なる親心をよそにしては我等の助かる道は一つもありません。それ故佛の本願は我等が助かる一番の根本であります。

今日青年諸君が熱心に道を求めらるゝについて一つ忠告を致し度い。諸君は此根本たる本願に氣づかずして、漫然信ぜねばならぬ、宇宙の偉大なる或力を攫まねばならぬ、といふて居られるのでは無いか。なるほど、それは信仰に至る端緒かも知れぬ。甚だしきに至つては其根本が何であるかを聞かずして、たゞ漫然我々のなす事する事、皆な佛のなさしめたまふ所ともひたいと苦しんで居る。現に昨日も九段におさまして一人の方が「私は何事も佛のなさしめたまふ處とおもへないで困る」と言われました。そんなことはたとへ思つたとしても、それはなげやりに過ぎぬ。天も星も日も月も南無阿彌陀佛、衣の襟をたゞいても南無阿彌陀佛とは、眞實信仰の極致ではあるが、理觀や道理で出てくる味ではない、眞の本

さて願の数はかくの如く多くあるが、我々は一々此願をいたゞかずとも、其親心の根本を戴けばよろしい。例へば親は子の爲に衣物をくれる、行儀をおぼえさせたい、學問させたい、等、種々無量に思ふて居るが我々必しもその一一の願心を知る事を要し無い。多くの願心が結局何によりて我等に届くかといふに、其根本の親心をしらせていたゞけばよいのである。是即ち第十八の選擇本願のある所以である。

選擇本願とは如何。其親心をば、成程ありがたい親のおぼしめしだと知らしめんとし、其願心であります。即ち親心をしらしめんとするの親心、つまり二重にかゝるのである。此願を以て我々に慈悲が届くのである、最も貴いありがたい願です。天親菩薩の淨土論、——論は御經を明らかにしたものである。其淨土論の中には、淨土願心ともあつて、要するに此願心をしらすに要點である。淨土論には又曰く、

彼佛の本願力を觀するに、もう逢ふて空しく過ぐるものなし、よく功德の大寶海を満足せしむ、

と、即ち親心をしらせてもらふ所である。我々親心をきけば空しく過ぐるものは一人もない、よく速かに功德の大寶海を満足せしむであります。も一つ明かにいへば、此親心をわかちしてもらへば、他の細かい願はみな其中にこもる故に皆一時にももらへるのである。故によく功德の大寶海を満足せしむといふたのです。南無阿彌陀佛は萬善萬行の功德の全體であるといふもこゝであります。

我々が本願をしるといふは如何か。此廣大なる親心をさいて堪へられぬよろこびを以て感謝し、これ迄此本願をしらず

願の願心をきかねば此味はわからぬ、其願心をとかれたが一部の大無量壽經であります。

偕其阿彌陀佛の本願を丁寧にいふてくれれば佛に無量の願がであります。大無量壽經には四十八願ととき、他の異譯の經には二十四ともあります。これは、縮めればどこまでもちぢむし、大きくすればどこまでも大きくなる。親の心を教へてみれば無量である、或はい、着物をさせたい、行儀を教へたい、學問をさせたい、等、無量の數であらはず事は出来る。しかしながらさりつめて數ふれば四十八、或は二十四とも數へることが出来るのです。即ち佛の我々に向つて下さる、佛心を數へたものであります。たとへば四十八願の中に、或は世間の人は地獄餓餓畜生の三惡道、即ちいひなほせば貪慾、瞋恚、愚痴に苦しんで居るが、我淨土には誓つて此等の事あらせまい。或は世には盲目跛足に苦しんで居るのがあるが、我淨土には天眼通及神足通を待させたい。又世人は他人の心がわからぬで惱煩を起して居るが、我國に於ては他心通を興へてそれらのことなからしめん等、つまり佛の淨土の理想であります。又或は世人は命が短かくして苦しむが、我國に於ては無量壽を待させん等、乃至一數へて親が子に向つて願へる如くである。現に三十八の願にはかういふものもある、

設ひ我佛を得んに、國中の丈夫、衣服を得んと欲は、念に隨つて即ち至り、佛所讚の應法妙服の如く、自然に身に在らん、若し裁縫染濯する事あらば、正覺を取らじといふ風であります。即ち我々の苦しむ欠點に向て一々最も適切にあはれみ、親の親心を示して下されたものである。

に過し來つたことを懺悔する、此時が即ち是れである。此事は私の頭に動かぬ故に、どいけれどもくりかへし申す次第です。親鸞聖人は、他力といふは如來の本願力也といはれた。御經の中にも其名號をさいて信心歡喜し乃至一念せんとある。今迄親はないと苦しみ、世は冷かなものと考へて居つたに、今初めて親の名を南無阿彌陀佛とさいて、直ちに世に親が居て下されたかといふことが信心歡喜である。

しかし親の名前でよろこぶのはまだたらぬ、其親の親心を喜ぶのである。故に聖人は、
聞といふは衆生佛願の生起本末をさいて疑心あることなし、これをきくといふ、
と仰せられた。實に此親が、此親があるかと、よろこぶのであります。

此の眞宗では本願を本とするといふ事をしらすものは少ない、僧侶が講座に登る時は直ちに本願いふ。けれども其本願にこれほどの深い味があるとはたれも思ふて居ない、しかるに歎異鈔にも眞光から、「彌陀の誓願不思議」とある。其本願をば、普通には地獄へ行くものを救ふ本願だといふ風に思つてゐる。無論夫にはまちがひはないが、それでは地獄とも未來ともしらすぬものが聞いてはわからぬ。現在が我等は地獄ではないか、腹がたつ、人がにくい、ねたましい、悲しい、現に是修羅道である。其我々に苦しみなからしめんと向かふ様より廣大のめぐみをたれたまふ。故に「彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて、...彌陀の本願には罪惡深重煩惱熾盛

の衆生を助けんが爲めの願にてまします、しかれば本願を信せんには……彌陀の本願をさまたぐる程の悪なきかゆへに云三本願の文には十方の衆生とある。十方の衆生であれば古人今人の別なく、東西をとはず、いかなるものでもといふのです。現に此私が其御慈悲の中にあるではないか。たゞこの願を信ぜよ、如何なる罪惡深重なものでも此願にもれるものは一人もない。既に阿彌陀如來の此の如き願あり、我々は實に安んずべきであります。

正信偈にのたまはく

如來所以興出世、唯說彌陀本願海、五濁惡時群生海、應信如來如實言、

如來如實の言を信ぜよとは實に貴き言葉である。釋尊一代の教澤山あるけれども、つまり此本願を屈けんが爲に出興されたのである。人生上歴史上の釋尊は、成道より入滅まで、たゞ廣大の佛心をしらすための御苦勞であります。いかなる五濁惡時の群生海といへども如來の親心をしらすして下された御言葉は之を信せずには居られぬ。

其五濁惡時の群生でも皆信仰に入れるといふ事について一つはなしたといふもひます。或重罪犯の一人が罪を悔いて懺悔をいたしました。其人は自分に實は罪を犯して居たのではない。しかし今迄は其事實を自分に隠して居たのです。されども自ら隠して居ることが心に咎めてたへされず、いよくその事實を申し出し、爲に裁判が延びたといふ事があります。されば其爲に相手の遁走して居る者も罪狀が明らかになり、重罪にあちいらねばならぬ様になりましようと思ひます。全體民事

り、心の繫縛をといてもらひました、此ほど樂なことはありませんが、私の迷惑をかけた人も、何卒みな各自して早く救はれ、心が樂にならんことを願ひます。といふて居りました。人間がそれほどに罪を自白して懺悔する以上は、過去の罪は問はず、生きながらもう救はれたのである。一切衆生必有佛性で、何人と雖も信仰をすれば皆かくの如くなることが出来るのです。故に私はかく信仰に入り得る人を殺す死刑は斷然いかぬといふもひます。何故かくの如く惡人がよくなれるかといふに、是れ佛の願心があるから出来るのである。誰か此願心にもれるものはありませうか、此罪人の事をひと事とももてはなりませぬ。

處で始めから申しますとほり、本願がありながら我等はそれをよるこはず、經文を見過して居たのは實にひどい事でありませぬ。倍て其ありがたい本願にきづかないのは何故か。正信偈の中に

彌陀佛本願念佛、邪見驕慢惡衆生、信樂受持甚以難、難中至難無過斯、

といふ文があります、此文は大經そのまゝである。即ち經には會更に世尊を見奉る、則ち能く此の事を信せん、謙敬して聞て奉行し、踊躍して大に歡喜せん、驕慢と弊と懈怠とは以て此法を信じ難し、

とあります。我は長々其本願をさながら、信することの出來なかつたのは何故か。此驕慢と弊と懈怠の爲である。心から謙遜して佛を恭まひ、敬まつて聞いて奉行する時は大に歡喜を得るのである。さりながら、驕慢、弊、懈怠は此法を信

刑事ともに、今日は自分の事は出来るだけ隠し、人の事は出来るかぎりあばくといふが普通であるに、彼は告發を待たずして、自分の事を明白にいひ出して、自己の生死を抛ちて懺悔をした。遂に他人の罪まで自分に着て懺悔する様になりまし。されど遂に他人の爲した事を自分の爲したることと云ふことが出来ぬ、彼の云ふには、「自分は虚言をいふ事は出来ぬ様になりました」と一點結果をもちかへりみない、たとへ自分は無論、他人にまで迷惑をかけても虚言はいへぬ、といふ様に彼の心中はなつて居ります。私は彼に、「本を貸したかよんだか」とき、ましたら、彼は、先日「はじかき」といふ本を拜借してよみましたと申しました。そんな本はないと考へてみましたが、能く考へて見れば、歎異鈔のはじめの「はじかき」といふのを「恥じかき」とよんで居たのでした。それほどの文盲の彼に、歎異鈔の眞髓がよめたのは不思議である。だん／＼さいてみるに、實に立派な信仰である。彼の語るには「人は自分ほどの馬鹿はないといふだらうが、實にしかたがない、自分は實に自分ばかりか、人まで迷惑をかける仕方のないのです。」と、彼の信仰は實に無意識であります。彼には念佛の意味もわからぬ、譯がわかればはじめからあしきことはせぬのである。彼はよきもあしきもはじめからあしきことではせぬ、よしあしの文字もしらぬ人はみな、まことのこゝろなりけるを、善惡の字しりかほは、大それたことかたちなり、實に彼こそ善惡の字もしらぬものである。「五濁惡時惡世界、濁惡邪見の衆生には、彌陀の名號あたへてぞ、恆沙の諸佛すゝめたる」。彼は申して居ります、「私はかく自白して實に樂にな

ずることは出来ぬ。驕慢とは自分の考を本として、佛の御親より自分の方がえらいと憍るものである。弊とは煩惱、懈怠とは自分がつまらぬ悪しき者であると自分できめ込んで居るもの、此三つの者はいつまでも信ずることは出来ぬ。自分のえらく考へる驕慢は、佛はかく／＼であるとながら自身佛であるかの如く自らえらく考へる、これではだめです。親に向つてもさうである、自分が親よりえらくなり、何事も自分で出来ることもふと如何しても親心をいたゞく事は出来ぬ。自分の方が高くなる佛の慈悲はわからなくなつてしまふ。自身の驕慢の爲にわからなくなつたのをしらすして、慈悲の親なしとももて苦しむとは何たる顛倒であらうか。

私共今迄の經過をかへりみるに、或時は、かふいふ事が理窟にあはぬとか、學理で推せばかうであるとか、色々考へる故に自分の考へか先にたつて願心を仰ぐことが出来なかつた。自分こそは却て、はじかきであります。何も無い、智慧も才覚もなき我々となつて、かゝる慈悲、本願を信仰せさせてもらふばかりである。

弊とは煩惱です、自分の煩惱で自分を塞ぐのである。懈怠とは怠りです。自分は親に捨てられて、親がへたて、居る、親の處へかへれぬとすてやりの自暴自棄です。

此等を捨てはじめ御慈悲はわかるのです。我々は實に是非しらぬ、邪正もわからぬ此身である。かくの如き者なれども、これをね恵み下さる大慈悲のありがたさよと氣づくのが、謙敬して聞きて奉行し、踊躍して大歡喜する味である。

私が此御言葉に氣づきましたは、此間高等師範で文類聚鈔

を講釋した日でありました。其の歸り道、あまり有りがたき故正信偈を誦しつゝかへりました。實に一句一句に一分のゆるみが無い。私は嘗ては正信偈ときけば、それは七祖聖教の中のよい文字を集められたもの位にもふて居りました。實に懺悔の至りにたへませぬ。まことに能く味へば一句一皆生きた味である。ふと其よむ中に憍慢と弊と懈怠とは以て斯法を信じがたしといふことを氣づいて、大によろこばせてもらふた次第であります。

今日世間に何ほど學問しても、何程命があつても、此法を信ずることの出來ん人のあるのは、みな此憍慢と弊と懈怠とに欺かれて居るのである。たとひ監獄に入つた人とても一念自分の惡に氣つきて、本願を仰ぐときは、憍慢にあらず、懈怠に非ず、一切善惡の凡夫人、如來の弘誓願を聞信すれば、佛は廣大勝解の人とのたまへり、是人を分陀利華と名く、善いも惡るいも一切善惡の凡夫人、善いからとても駄目、惡いからとても駄目である。一切智慧の毒を滅ぼすなりで、自分が智慧ありともふは智慧の毒、自分は愚なりと悲觀するは愚の毒である。佛の願力はこれら智慧の毒を滅ぼして、如何なる愚鈍の人といへども人中の分陀利華、廣大勝解の人となる。

私共自身をかへりみれば人に法をとくなど、決して出來ぬ身である。今の囚人からみれば自分に法をとく資格杯少しも無い。されど佛の心を案ずれば、其人を通して佛の御心がしめされる、實にありがたいものであります。此本願弘願といふが實にありがたい、法然聖人も愚にかへりて信ずると仰せ

蒙らしめたまふのである、本願力が加はつて下さるのであります。其故に我々の煩惱で塊つた鐵の様な心も、卒に輕々となつて下さるのです。此本願を仰ぐときはたゞ謙恭奉行の他はない、自然に頭が下つて下さる。いつも私共は己は信仰をやつて居るのだといふ風になりやすいが、かの囚人はどうか、信仰とはいひながら、實に人に迷惑をかけて申譯がないといふて居る、飽まで謙恭奉行である。しかるに私はさも私は顔をして居る、實に慚愧の至であります。私共は唯佛の廣大の恵みをきいて、深く感ずれば感ずる程、いよ／＼謙遜に謙遜を加ふるの他ありません。聖人は流罪の後に自ら愚禿と仰せられた、罪なきに流罪にあひながら、愚禿とまで謙遜をなされたのである。一代愚禿と仰せられたはいよ／＼謙恭奉行であります。而して其聖人の謙遜の根本は何處にあるか、「彌陀の五劫思惟の願を案すれば、偏に親鸞一人が爲なりけり、されば、そくばくの業をもちける身にありけるを、たすけんとねばしたちける本願のかたじけなさよ」と、此のいふべからざる信仰が根本であります。此根本なき謙遜ならばそれは偽善である。偏に親鸞一人が爲なりけり、今かくの如く流罪にあふも罪業の故である、かくの如き業をもちける者を洩さず助けたまふ御慈悲のかたじけなさよといはれたのである。此大慈悲をれもふとき我等は實に慚愧の至りてあります。

られた。愚の者が信仰を得ることか出來るのであります。實際淨土眞宗の眞意は愚者にいたゞける處にある。しかるに彼是と文沙汰をするはまことに勿体ないことであります。而して憍慢と弊と懈怠は何の戒めであるか、偉大なる本願に向つてさわりをせぬ様に戒められたのである。本願の御力は憍慢や、弊や懈怠よりもつと御力強い、故に一度はこれらに陥つた我々共も結局佛の恵みは憍慢、弊、懈怠の胸を貫ぬきて、此我々をして遂に大願海の中に入れて下さるのであります。繰返しく中しますすが自分をみて居てはつたり駄目である。自暴自棄の子供にむかつてかくまで善くして下さると聞かして貰ふて、自暴自棄の私もあゝありがたや申譯ないといふ心になつて、上下左右を論ぜず、自分の力に叶ふだけの事をさせていたゞいてよろこばしめてもらふのである。又憍慢の者で自分は親よりもえらいとれもふて居るものも、親の親切が届けば、あゝ我誤されり、我れ誤されり、我えらしとれもひしは誤りにて何から何までみな親のみ恵みなりけりと氣がつくとき、憍慢の心も折れるのである。

我々人生に於て一舉一動、すること爲すこと、親をなきがしろにして居るか、或は仕方がないと失望、落膽、懈怠に陥つて苦しんで居るか、孰かである。唯今此本願念佛、佛陀の親心に氣づかせていたゞき、夜を明けてもらふより他はない。其所謂夜のあけた人が廣大勝解の人である、人中の分陀利華であります。あゝ何程いふても味はつきませぬ。昨日は東京監獄へゆき今の囚人の件につき深く感じました。聖人は信の巻に於て如來の加被力と仰せられてある、實に佛陀の力を加へ

此世界の中に人の生ずる事皆水池の如し、生滅常ならず、或は一歳二歳或は一二十幸にして四五十に至ることも亦難し、七十に至る者ありと雖も、古來猶稀なり、人只眼前の老る者を見て老を待たずして去る者の多きを思はず、眼や世間を稱はざる時に苦と爲す、如し或は意に稱ふも亦多時無し、父母兄弟親眷屬或は疾病して死し、或は殺傷離散し、或は自己の大限忽然として至る、平生の罪惡豈に全く無きことを得んや、且つ目前を以て之を言へば一の不正の念を起し、一の不正の語を説き、一の不正の色を視、一の不正の聲を聞き、一の不正の事を爲す、過惡に非ずといふ事無し、況や食する所の者は衆生の肉、衣する所の者は亦衆生を殺して得、又況や所有の過惡は食肉に止まらず、人と思はざるに懲り、則己に之を思へば誠に畏る可き也、少より老に至る途、生より死に至る途、穢業既に多し、纏綿堅固にして解脱するに由無し、閉眼の後業縁に隨て去る事を免れず、沓々冥々として何れの處に在ることを知らず、或は地獄に墜ちて諸の苦痛を受け、或は畜生と爲て人の害殺を受け、或は餓鬼に生じて飢火身を饑き、或は修羅に入て瞋恨に迫められ、善業有つて天上人間に生る事を得と雖も、受盡て福報盡に依りて最も輪廻を離脱するの捷徑と爲す、色身得難し、健康の時、速て此大事を辨じて、常に念を作す當し、云く吾曾て無始より以來六道に輪廻して、曾て此の法門を知らず、故に出離することを得ず、今日之を知る、豈即時に手を下さる可んや、年高けたる者は固に勉力すべし、年少かき者は亦因循す可らず、命終て徑ちに極樂世界に生ず、廻視すれば死して陰府に入つて閻土に見えて恐怖を受くる年を回うして照る可らず。

龍舒淨土文

告白

明來暗去

田中 みな

此度は計らずも不可思議なる佛縁にあひ奉り、廣大なる慈悲を喜ばせて頂きます事、此の上もなき幸福と實に喜んで居り升す。信後まだ日も深く深き御教理などは一向存じませんけれど、恐なる心にかく迄も貴き御慈悲を味はせて頂きました事の嬉しさ有がたさの餘り、今日迄の淺間敷有様を皆様の前に懺悔させて頂きますのも、偏に佛の淺からざる御引廻しによる事と信じて居り升。

仕合なる事に私は眞宗の家に生れ、祖母初め母などは私の幼少の頃より御教の有かたき事はよほど深く信じて居りましたが、先頃學校の都合により十一二才の時分から基督教主義の學校に居りました爲め、自然佛法の御縁には遠ざかつて居りました。昔氣質の祖母などは私共が基督教を信ずる様なりはせぬかと、非常に心配致したことで御座い升。

しかし子供ながらも眞宗の家に生れをした事は承知致して居り升から、まさか基督教を信ずる様な事はないと誓つて入學致しましたが、日々聖書の講義を聞き、日曜の教會へも出かけるやうになりましたと、自然感化せられましたしらずしらず佛教とならべますと基督教の方がよき様な心持が致し、こ

事が起りました、例のひねくれたる邪推深き心より、人を疑ひ自身計り正直者の様に思ひ、我儘なる舉動斗致しました。其爲め家族の間にも種々な誤解や衝突が起りました。實に私の心配は一通りではありませんでした。心配の結果、とうとう病氣にかかり、不眠症になりました。ひそかに考へますれば何心なく打過ぎた事も非常な罪惡の様思はれ、いたづらに過去を追想しては心を苦しめ、かく迄罪深き身は將來如何なる果報を受ける事かと、夫のみ心にかかり、さほど重からぬ病氣迄も、連も全快出来ぬ様獨りて信じて居りました。其爲め年老いたる兩親の事や、ことに不幸なる子供の行末など實に心を痛める種で御座いました然し罪もなき子供に余計な心配させてはならぬと存し、子供の手前ではよほどつとめて平氣な風をして居りました。内心は實に苦敷く、ことに夜中漸く二三時間位しかふせられませず、目が覚めますと自身の罪深き事、恐ろしくなりました。しらず／＼溜息爲しますので、そばにふせつて居り升子供も、自然心配致す様になり、始終不愉快な顔計して居りました。もう其頃から子供や召使の手前など遠慮致す氣もなく、見る物聞物實に苦悶の種で御座いました。然し兩親は兼てより御法を信じて居り升ので、心配致しなからも佛法のおはなしなど致し、時には有がたき雜誌など讀むやうすゝめられますけれど、其時分の私の心中は今更何を讀んでも何を聞ても、連も私の苦痛のがれる事は出来ない事と、深く思ひ込んで居り升ので、兩親の信切なるすゝめにも

余り八ヶ問敷申され升ので仕方なくお説教など伺ひ、佛書を

とに教師はじめ基督教信者の慈悲深く親切なるには、子供ながらいくらか感じて居りました。夫に佛教の事か偶像教などといはれ升と、祖母などの佛様を拜して居り升のか何となくいやな氣持が致しまして、折々外國人の教師など宅へ遊びに來られますと、お内佛を見られますのがまことに恥かしく、大急ぎでお佛壇のお戸をしめて居りました事、今でも思ひ出しては妹等と笑ひはなしに致して居り升。夫かと申して基督教を深く信仰致すでもなし、わからずながら佛教と申物は陰氣な教とのみ誤解して居りました。其内學校時代も過ぎ去り自然基督教にも遠ざかりまして、時には母などにすゝめられ築地本願寺の令女教會には折々出席致しました。追々承つて見ますれば別段陰氣な御教と申でもなし、結構なるおはなしをも伺ひましたが、兩親は健在なり、是と申す不幸にも遭遇致しません故が、宗教には冷淡で御座いまして、貴き御教も只耳に聞きます斗、心には少しの信念も起りませんでした。其後結婚致しましてからは誠におはなしにもならぬ不幸斗り打續きました。お恥かしひ事に私の氣質極ひぬくれたるたちて御座いまして、如何なる不幸に出あひましたも人様に打明け御相談するとか、同情して頂くなどいふ事は大嫌ひで御座いまして、只自身の心一ツに辛抱して居りました。其内子供も一人御座いまして。其爲め幾分か苦勞も忘れて居りましたが、かゝる不幸な境遇に居りまして一向宗教に志すといふ氣も起りませず、實に淺ましい心で御座いしました。

かやうな有様で殆んど十年餘うか／＼と経過致しましたが、昨年の春計らざる事より又もや私一身上に非常な心配な

も拜讀して見ましたが、却て一層心を苦しめるやうに思はれました。丁度其時分て御座いまして、父が夏季講習會に参りはじめ近角先生のお講話を承り、大層有がたく喜びまして、是非先生をお招きするからよく聴聞致やうに申され、先生も早速御出下されゆる／＼と御法話の末先生の十年前煩悶遊ばされた當時のおはなし承り、誠に失禮ながら自身の心にくらべて、一入深く感じました。かゝる御方に私の心中打明け御話し申し上げ御教示頂いたらと一時は思いました。矢張例の氣性でいよ／＼打明けておはなしするといふ勇氣は中々出せせず、佛の御慈悲は目前にありながら一向心附かず、折角の好機會を失ひ、又もや元の通り煩悶致して居りました。其後も父にすゝめられ日曜のお講話を伺ひました事も御座いしましたが、拜聴致して居る内は何となく有難き心地致し、私如き罪深き者今日迄長らへさせて頂くは、偏に佛の御庇護による事と思はれ、一日も早く信仰に入らせて頂きたいと切りと氣をもみませず、どふしても有難き心が浮びませず、すぐ元の通りの有様で御座いしました。其内年の暮にもなり、昨年中の事願みませれば、私一人の爲め兩親にも一方ならぬ心配をかけ、只さへ虚弱なる子供は私の不注意の爲めか度々病氣計爲し、何に付ても心苦敷事計りて御座いしました。年は改りまして私の心の上には少しの變りも御座いませず、本年ころはいよ／＼大不幸が來るにちがひ無いやう思はれ、其苦痛は何共申様は御座いませぬ。最初には色々心配して呉ました家族の者まで、余りにも長き病氣と私の剛性なるにはあき果ました

物と見へ、自然同情も薄らぎ只困つた者だと歎息する斗りて御座いました。

かやうな有難き日頃信仰篤き母もとうとう心が迷ひました物と見へ、私の運命をある易者に見てもらひました處、先祖の佛事など何か手落はなさか注意せぬと大變な事になるといはれ、眞宗の家にてまことに恥しい迷信とは存じながら、外に致し方も御座いませんで、菩提寺の御住職をお招きして、三部經を上て頂きました。丁度先月の十日で御座いました。私も拜聴致して居りましたが、別段何の感じも起りませんでした。丁度觀經を拜聴して居ります時郵便が参りました、何心なく開封致しますと、其頃避寒の爲め伊豆の修善寺に滞在して居りました父のもとより、私の事を案じました余程の玉舎域悲劇の邊りを讀み初め、河闍世王苦悶の所に至りますと、實に私の心其儘で御座いますので。思はずぞつと致しました。尙熱心に讀んで参ります内、大罪を犯された河闍世王ですら佛の救済により大安神を得られた所まで拜讀致しますと、何となく私もれ救ひを受けるのではないかといふ心がふと起りまして、其夜ふせりませす時は、何ともしれず極てかすかなお光りを認めました様で、何時になく心安らかに夜明迄安眠致しました。實に昨年四月の頃より安眠致しましたのは、其晩初めて座りました。實に自分ながら不思議でありません、早速此事を両親にもはなします、と何れも非常に喜びまして、是れには全く佛の御力による事と自身も不思議に思ひました。翌日は懺悔録繰返の熟讀致し、近角先生初め

皆様方のお懺悔を取りて自身の胸にびしくとこたへました。其夜より懺悔録を枕元に置き、臥せられませぬ時には、拜讀致す積りて居りましたが、矢張前夜と同じくよくやすみませんでした。只今すら思ひますと是がそも私の心に佛のお慈悲をみとめさせて頂いたはじめで御座います。實に昨年以來苦悶中には、両親は非常に心配致し、何か望む事はなきか、どふしたら私が満足するであらふかと、夫は勿體なき迄親切になくさめて呉れましたが、其親切すら少しも嬉しいとは存じませず、最早や私の身には満足と申事一つも御座いませぬ、只一夜でも安らかにふせられたらどんなに仕合であらふと申た位で御座います。彼は思ひ合せ静かに考へて見ますれば、昨事以來長き間の苦しみは、此廣大なるお慈悲一つに心附かせん爲めの御方便にてありし事、初めて悟らせて頂き、實に有難しとも嬉しとも申様は御座いませぬ。此上は一日も早く近角先生にね目に懸り、懺悔致し度と存じ、お宅に向ひ委細おはなし致し、大さに安神致しました。其折もいろ／＼有がたきおはなし伺ひましたが、其時はまだ心底には有難といふ心は起りませんでした。お救ひに預つて居るとは承知して居りながらどふいふわけ皆様方の如く喜ばれぬであらふと、非常に氣になりまして、近角先生に伺ひましたら、夫は煩惱の爲めに喜はれぬが、決して心配するには及ばぬとおさとし頂きまして、尙頂戴致したお雑誌など心靜かに讀んで居りました。何時とはなしに喜びか深く、長ひ間心の内に積み重ねた罪其儘が、お慈悲を喜ぶ種となりまして、煩惱即菩提の

御ことわり一入切に私の身には喜ばれました。

昨年以來火の消へたる如き淋敷家屋も俄かに佛のお光明に包まれたる心地致し、両親の喜びは申に不及、一時は「内に居るのはいやだ」など、不平計申て居ました子供迄、非常に喜び、此節のやうに嬉しい事はないと申て居り升。其を聞升私の嬉しきはまゝどんなで御座いませう。自分の事は打捨てて子供の事のみ心懸つて居りましたか、喜んで呉升顔を見るに付、私が子供の事思ひます如く、佛の御目からは如何に私苦んで居るのを御憐み下されたであらふか。また今日かくまで喜ばせて頂くのを如何に御満足に思召すであらふかと、實に勿體なき迄に有がたく存じ昨年も今年も境遇に於ては少しの變りも御座いませぬのに、今は見る物聞物皆喜びの種となり、世の幸福なる御方々にくらべますれば、不幸極まる今日の境遇も、此不幸あればこそかゝる廣大なる御慈悲と、不幸其儘皆喜びと變りました。先日もある心安き方が、私の心狀の餘りにも急變しましたので、あともどりますやうな事はなひかとお尋ねしたので、私自身の心なら或は變るかもしれません。が今は佛様か變らして下さらぬ事と信じて居り升と申て、大笑ひ致しました。實に此節にては不思議なほど心強く人生の浪風如何にあらく共、此御恵にあらば恐るゝ所は少しもなき様に思はれ升。是につけても信前の御方々、人生の不幸などに御失望なく、不幸其儘がやがては大安心大歡喜の基礎なる事に早く御氣付遊ばすやう、私の苦がき經驗にてらして切に／＼お救事申上遂に長くなりました。如何ほど申ま

餘りくだ／＼救事申上遂に長くなりました。如何ほど申ま

しても拙き言葉では心の喜萬分の一も盡されませんが返す／＼残念に思升。呉々も廣大なる御慈悲有がたく、かくまで貴き御教を御取次下されし先生の御高恩、次には今日迄導き呉ました父母の慈愛、只々感謝のお稱名よりお禮申上様御座いませぬ



御座いませぬ。只々感謝のお稱名よりお禮申上様御座いませぬ。只々感謝のお稱名よりお禮申上様御座いませぬ。只々感謝のお稱名よりお禮申上様御座いませぬ。

教誨

教誨自誠

近角 常觀

二、佛を除きて餘は能く救ふこと無けん

人間が人間を救ふことが出来ると思ふならば、大なる間違である。金錢で人を救ふことが出来ると思ふならば誤りである。人間の考や手先で人を助け遂ぐる事が出来るものと思ふならば夫こそ佛をなきものとする慢心である。かく言へばとて決して人を救ふべく物質的に精神的に心配するを無効と云ふのではない、否々物質的に精神的に人を救ふべく心配せねばならぬが、其救済は佛陀より來るといふことを決して忘れてはならぬといふことを切言するのである。一片の食も一言の慰も一擧手一投足の勞も、どうか其人の心に光明が差し込むやうにした、佛の恵を届けた、否々佛の恵夫自身より外はないと思ふて我等は一點の私を挾んてはならぬ、若し佛の恵みによりて心が開けて來ねば決して金錢や人力で人が救へるものでない、このことを覺悟して居らねばとかく人間は自分の爲したことに目が附きて不足心を生ずるのであ

唯願くは速かに佛の所に往つべし。佛を除きて餘は能く救ふものなし、今汝を慰むが故に相勸導くなりと申された、是は實に至言である、親の愛を以てするも救ふことは出來ぬ、唯佛あるのみ、若し佛を除ては何人も救ふことは出來ぬ、そこで我等は犯罪に陥りたる人に此佛の心を説きて其救を仰ぐより外に仕方がない否々我々自身が其佛の力でなければ逆も逆も救はれぬのである。

其佛の力とは如何といふに即ち大悲大願である、歎異鈔の第九章に

よろこぶべきことをあさへてよろこばざるは煩惱の所爲なり、しかるに佛かねてしるしめして煩惱具足の凡夫とあほせられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのもわれらがためなりけりとしられていよ／＼たのもしくおぼゆるなり。』
をとりおしくおもへども、娑婆の縁つきでちからなくしてをばるときに、かの土へはまいるべきなり、いそぎまいるたぎこころなきものをことにははれみたまふなり、これにつけてこそ、いよ／＼大悲大願はたのもしく往生は決定と存じさふらへ。』

嗚呼我々は日夜喜ぶべき大悲の御恩を蒙りながら夫を喜ばぬ御恩しらすのものである、しかるにかく喜ぶことの出來ぬは煩惱がありて喜ぶべき心を抑へて喜ばせぬからである、しかるに佛陀は煩惱あるものは救はぬ捨てるといふのではない、佛かねてしるしめして煩惱具足の凡夫を救はんとの仰せてある、實にこのかねてしるしめしてといふ一句は佛ならでは頂

る、否々金錢や人力も我等が自分のものではないといふことを覺悟せねばならぬ、故に世の犯罪者も佛の恵みといふ事に氣附きて來ねば如何程金錢があろうが、才智があろうが、夫て人世を渡れるものではない、否世の多くの人が金錢や才智の爲に犯罪に陥りた人が多いのである、經文にもある如く、田あれば田を愛ひ、宅あれば宅を愛ひ、亦田なければ亦愛て田あらんことを欲ひ、宅なければ亦愛て宅あらんことを欲ふのである、田や宅や金錢や才や、伎倆の有無のみに目が附きて佛の恵みに氣附かぬのが人間墮落の根本である、若し一點恵みが氣附きてみれば金錢なくとも才智なくとも必ず自然に道が開くものである、否々金錢も自ら來り、人間の小才智を勞せずとも必ず救済の道が自然に開け來るものである。

我等は煩惱具足の凡夫である、忽にして曠りの心も起る、貪りの心も起る、此の如き我等が他の人を救ふといふことは中々出來ぬ、世の中に何より貴きは親の子に對する慈悲である、子に病あるときは健康なる子よりも其病ある子を愛ひ、墮落せる子あるときは他の出來のよき子よりも其子を愛するのである、これが親の情である、されど病あるときは誰れも自己の不運を嘆き病氣を苦にして親の心に氣附かず、墮落せる子は自己の悪しさを悔みずして却て親を無情と思ふて怨むものである、かく眞實の親の愛すら感ずることの出來ぬものである、況んや他人が口先さや手ささで人が救へる筈はない阿闍世王は大逆親を殺すに至つた、夫にも拘らず、親類婆沙羅王は殺されながらも其子を怨まず、終に阿闍世王が大に苦みたるとき、却て其子を救ふべく空中より告げられた言に、

くことの出來ぬ言葉である、我等は曠りの心が起り、貪りの心が起りて自分乍ら驚く次第である、まして況んや他人のあされはてるは無理なきことである、又我等が他人に對しても同様である、如何に我慢せねばならぬと覺悟しても人があまりに甚しき煩惱を起すときは忽ちあされはて、手を引くものである、しかるに今佛は左様ではない、佛はかねてしるしめして、かく煩惱を起す我等なることを徹鑿したまひて、其者を救はんと佛の佛心である、謹慎せねばならぬと覺悟はしなからず、忽ち謹慎を破り犯則をしてはならぬと氣をつけながら忽ち立腹したり、短氣を起すものである然るに佛はかねてしるしめして、かくの如きものなるかゆへに之を救はんと大悲、之を他まで見捨てぬとの大願である、かく御心を注ぎたまへる何處までとも底しれぬ佛陀の願心のましますこと實に我等が無上の安慰である我等煩惱の塊なる身は唯此親心に安んずる外に一點頼むべき所を見出さぬ、そして世の罪に苦めるの人も此親心を蒙りながら夫を知らぬなれば、夫を知らせるが何より早き救で、しかも唯一の救で一刻も早く氣附けねばならぬ救である社會に自由の身であつてすら諸の煩惱を起すのである、罪に苦めるが上に身の自由までを失へるの人は煩惱の起るも無理はない、併其煩惱あるものを救はんとかねて深き誓をたてたまへる親心を仰がずんば他に救はるべき道はない。
さて次に人生最後の問題は死である、人間は如何に覺悟をして、如何にあきらめても名残り惜しく思ふのが人情である、死といふ間に臨んだならば人間萬事頼みとなるべきも

のほ一つもない、如何に平常佛陀の恵みを仰ぎ念佛しつゝあるものでも、死に臨まば誰れとて名残惜しく思はぬものはなからう、此時に至りて親の愛も子の愛も何の益にも立たぬ、若し一瞬時でも命を延ばすことか出来るならばと思ふは人情である、併婆の縁盡くるならば止むなく力なくして終らぬはならぬ、普通にしても此の如くである、況んや死刑の如きは人間として忍ぶことの出来ぬ刑である、しかも確かなる信仰に入り、全然人格一變して無我となり心の底まで從來の罪を懺悔して生きながら佛のやうになつたものがむざむざ絞首臺に上らねばならぬといふは實に斷腸の思やるせなく思ふ次第である、現に此度の刑法改正につきても私は人知れず心配のみして晝夜その事が念頭を去らず、筆とることも出来ず、現に此歎異鈔の文を解せんとして幾たびも筆を投じた次第であります、遂にかく心中を洩らねばならぬことになりました、私は幼年の時蘇格蘭のメリー女王が首を斬らるゝ圖を見るに其前に僧侶がバイブルを讀みかかせ居るを見てなぜ此僧侶は此女王の命を助くることが出来ぬかと齒搔ゆく思ふたことがありましたが、今は私自身が實に其位置に立ちつゝありますこの事はかりは昭代の恨事と存じます、私は五躰を地に投して陛下仁慈の御大心に哀願して改善者に聖恩の枯骨に及び特赦減刑せられんことを祈念し奉ります、私は黙しきれず明言しました、冀くは諸君も同じく信仰の上より心中に哀願したまはんことを望みます、嘗て歎異鈔講義に申し述べた無我の信者清水彌三次郎を初め、入信悔悟の人々が統首臺に上り空しく娑婆の縁つきて力なくしてをばりたのであります

しが入信改悔の後控訴廷に出て無期の言渡を受け悲泣感謝して服罪した者であります、其文に曰く、不肖が先年高教拜聴の後平素信仰する彌陀如來の光明無量の御慈悲と思へば其難有きは何となく深遠に想ひやられて夜臥するも獨想しては何ぞ如來正覺の高きにまじく不肖の境遇を憐憫したまひて見捨てたまはぬ同情不思議の御親厚に唯涙に咽ふ而已に候と、又近々宣告あるべき鴎鴨監獄在監中深く罪惡を懺悔して自首したりし重罪人福本藤吉は根本的に改悛して如何なる罪にも服する覺悟をして居ります、はしがきを「はしかき」と讀み違へたるは彼の信状であります、必ずや、佛の御恵みによりて數等減刑せらるゝてありませう、かく豫審控訴までに入信せるものは自然に法律上の恵みを受くべきも上告再審已後に入信せるものは之に浴するの機會がありませぬ、かく時に遅速こそあれ一旦心違開發したるものは信心清淨の人たるは同一であります、かく心中までも無碍無抵抗になりたる人若くばなり得る人を空しくするは實に殘忍無慘の極ではありませぬか。

しかし難有きことには稱名念佛の聲の絶ゆると共にたしかに彼淨土に参りたのであります、併いかにたしかかな信仰に入り安心すればとて決していそぎまゐりたき心はないのである、彌三次郎は一日一日が花でありますといふて天恩佛恩を感謝しつゝあつたのであります、久遠劫より流轉せる苦惱の舊里はすてがたく、未だむされざる安養の淨土はこひしからずさふらふことまことによく、煩惱の興盛にさふらうにこそ實に眞情であります、しかし佛陀無限の大悲は「いそぎまゐりたきこゝろのなきものをことにあはれみたまふなり」嗚呼かくまで待ちたまひ、召したまふ佛の御國にゆくことをいそがぬものを却て特に憐みたまふが大悲の御親にてまします、これにつけてこそ大悲大願はたのもしく往生は決定と存じ候へ、あゝ彌三次郎の死したるは去年の秋の彼岸でありました、たが今丁度また春の彼岸になりました、彼は佛の御國より大悲の如來とともにかくいそぎ参りたき心のなき我等を憐みつゝあること存じます、そして大悲大悲心を以て世々生々の父母兄弟たる吾人を護り下さることを確信いたします、如來二種の回向のありがたき、辱なき此大悲大願の御佛を除きては能く救ひたまふ親はない、此親心の御佛の上にはあらはれたまひて淨き御國の此世までも現はれたまはんことを念じます。

肉刑

超世の悲願さしより われらは生死の凡夫かは有漏の穢身はかわらねど 心は淨土にすみあそぶ かく認めつゝある時恰も北海道樺戸監獄中島兵吾より葉書が着しました彼は一旦死刑の宣告を受けたるものなり

肉刑は何の時より起る、其れ果して聖人の意なる乎、或人曰く、尙書に之を言ふと、然れども之を言て未だ詳ならず、抑後世民を威さんと欲する者之を爲す也、夫れ罪人を炮烙すれば商紂が身を危ふする所以なり、人の目を齧る人の面皮を剝ぐは、吳船が國を覆す所以なり、油鹽を鼎俎に沸し、人の中に置之を烹る者有らば、齊楚等の君終に滅亡に至る所以なり、而るに聖人之を爲すと謂はんや、或人又曰く、其の人且削、周易に亦之を言ふと、然れども易は經なり律に非ざる也、卜筮の書なり、刑書に非ざるなり、民用に前むる所以にして、民罪を罰する所以に非ざるなり、天且削とは象なり、眞に非ざるなり、且つ肉刑は漢の文帝に至つて始めて除かる、萬世より以下其れ文帝を以て非なりと爲んか、文帝を以て賢なりとせん乎、もし以て賢とする時は肉刑の非なる事知んぬべし、然りと雖も帝は則ち誠に賢なり、而れども遺恨有り、宮刑の未だ除かざる事、嗟呼痛ましき哉言ひ難き事や、業報の循環して息む可らざるや、何の時にか龍華の世を見る事を得ん。

(雲棲寺沙門珠宏「竹筵三筆」)

講義

歎異鈔

近角 常觀

第一章 (續)

彌陀の本願まことにねはしまさば、釋尊の説教虚言なるべからず、佛説まことにあはしまさば、善導の御釋虚言したまふべからず、善導の御釋まことならば法然のあほせむことならんや、法然のあほせむことならば親鸞かまうすむねまたもてむなしかるべからずさふらふ歟、詮するところ恐身か信心にをきてはかくのごとし、このうへは念佛をとりて信じたてまつらんとも、またすてんとも、面々の御はからひなりと云々

是れ正面より積極的に堂々と力強く聖人の信仰を告白し給ひたるも言葉である、彌陀の本願まことにあはしまさば」といへる一句は實に信仰の根底である、今日青年が深く他力信仰に心を寄せ『歎異鈔』を拜讀しつゝあるが深く其他力の根底に氣を着けねばならぬ。他力と云へばとて唯漫然と自力では行かぬと投げ遣りにする事では無い。我等が乗托すべき力を見出さねばならぬ。私は自己の實驗を告白するに初めて信仰に入つた初一念の心持は何の事はない、佛は慈悲の塊である、佛とは慈悲ばかりである、其慈悲は私如き悪しき者を先方より

はない、彌陀の本願のまことなる已上は親鸞の申すところ決して空しかるべき筈はないとの手強き御教化であります、實に彌陀の本願其儘か釋尊の説教、善導の御釋、法然の仰せ、親鸞の御信心であります、此講義の劈頭に掲げたる彌陀の五却思惟の願をよく／＼案ずればひとへに親鸞一人がためなりけり、さればそこばくの業をもちける身にありけるをたすけんとおぼしたちける本願のかたじけなさよとは、この本願の親心を聖人が御受なされた御自誓である。

かくたやすく頂けば何事もなきやうなれど、釋尊此世に出てたまひ、横説堅説五十年間の説法は畢竟此大悲の親心を五濁の凡愚に知らせんが爲である、正信偈にも、如來世に出興したまふ所以は、唯彌陀の本願海を説かんとり、五濁惡時の群生海、應に如來如實の言を信ずべし、と宣ひたるが是である、されど其如來の本願は如何なる大罪人なりとも助けんと親心なれども、親心に甘へて大惡を犯すものもあらんかと警戒のため五逆罪と正法誹謗のものは取除けるとまて注意したまひしが、遂に王舎城の大騒動が起りて、韋提希夫人は苦惱し、阿闍世王は五逆罪を犯すに至りて見れば、釋尊も遂に彌陀本願の極點まで開顯したまひたのが觀無量壽經である、而して唐朝の善導大師か盡十方一切の三寶三世の諸佛釋迦佛彌陀佛觀音勢至等に至心歸命して其觀經の奧義を闡き示して下されたのが四帖の疏であります、即ち觀經には長々と定散兩門の益を説くと雖佛の本願に望むるに、意、一向に彌陀の佛名を稱せしむるに在りと仰せられた、かくの如き尊き聖教も高閣の上に束ねられて其眞意を味へるもの少なかりしに、法

進みて同情して下さる友である、恵んで下さる親であるとも言ふべき歡喜の情であつた。此親の慈悲に氣の着いた時が信仰に入つた時である、而して佛の光明とは此慈悲の光であり、此名號は即ち親の御名であると段々氣附かして貰ひました、然るに今日の青年の多くは此佛の恵みに氣附く初一念の感なくして漫然と他力に任かすと云病弊がある、猶一步進みて其氣附くべき慈悲の慈悲たる所、親の親たる親心は何れにあるかを注意せねばならぬ、其慈悲は如何にあるか、親心は如何程であるか、五劫の間一念も餘念を雜へずに我等を救はんとて思惟したまひたる慈悲心である、永劫の間一刹那も止むときなく我等かために苦行したまひし清淨眞實の親心である、即ち是が彌陀の本願である、如來の願心である、此親心を我等が絶対に信賴する他力である、聖人が行卷に他力と言ふは如來の本願力也と宣ひたるが是である、此一點疑ふべからざる親心の本願を正面より示したまひたのである、其親心を釋尊は大經に設我得佛十方衆生至心信樂欲生我國若不生者不取正覺と説きたまひ、其御教を受けて善導大師は若我成佛十方衆生稱我名號下至十聲若不生者不取正覺といひ、其教のまゝを法然上人は選擇本願念佛南無阿彌陀佛往生之業念佛爲本と仰せられた、其法然上人の仰が即ちたゞ念佛して彌陀にたすけられまいらすべしとの御教化である、其仰を蒙りて信ずるより外なき親鸞なれば、更に何のはからひもないのである、唯念佛して助けられまいらすべしとの法然上人の仰が即ち彌陀の本願である、所謂形をみれば法然、詞を聞けば彌陀の直説である、其彌陀本願の御はからひにまかせ奉るより外

然聖人求法の心やるせなく、嵯峨の清涼寺に七日の間參籠したまひ出離の道を求めたまひ、後に黒谷の報恩藏に入りて五遍一切經を讀みたまへど未だ安心したまはず、遂に惡心僧都の往生要集を導きとして善導大師の四帖の疏を披きたまひ三遍目に至りて散善義の一心專念彌陀名號行住坐臥不間時節久近念念不捨者是名正定之業順彼佛願故といへる文に氣を附けたまひ、如何にも佛の本願に順ひて念佛するの外はないと、決定したまひて念佛往生の一門を開きて選擇本願念佛をすゝめたまひた、實に承安五年春生年四十三歳の御時である、而して親鸞聖人は多年求法の後聖德太子の御導きにより建仁元年の春即ち承安五年より二十七年の後吉水の禪房に於て其選擇本願念佛を御聞きなされたのである、聖人は化卷の終に其渴仰の情を披瀝したまひて曰く、年を涉り日を涉りて其教誨を蒙るの人千萬なりと雖、親と云ひ疎と云ひ此見寫を獲るの徒甚だ以て難し、爾るに既に製作を書寫し、眞影を圖書す、是れ專念正業の徳なり、是決定往生の徴なり、仍て悲喜の涙を抑へて由來の縁を註すと、如何にも廣大なる慶喜である、親鸞の信ずる所、此先師の教の儘を奉じ、如來の本願の儘を信ずるのみである、さればこそ化卷の次の文には慶哉樹心弘誓佛地、流念難思法海、深知如來矜哀、良仰師教恩厚、慶喜彌至至孝彌重と感泣したまひた、これが親鸞が胸中をありのまゝにさらへ出したのである、信するすべしである、この上は此の如き廣大なる念佛を信ぜんとも信ぜぬとも面々の考に任す次第である、親鸞は一點の私を以て強ゆるのではない、たゞ此の如き廣大なる親心、大悲の御名をきいて何人か之を信

じ喜ばずして空しく過ぐることは出来ようと、實に悲喜の涙を仰へて聖人の御心の儘即大悲の願心の儘を御示し下された金言であります。

第三章

善人なをもて往生を乞ふ、いはんや悪人をや、しかるを世のひとつねにいはいはく、悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと、この條一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり、そのゆへは、自力作善のひとほひとへに他力をたのむころかけたるあひだ彌陀の本願にあらず、しかれども、自力のころをひろかへして、他力をたのみたてまつれば、眞實報土の往生をとぐるなり、煩惱具足のわれらには、いづれの行にても生死をばなることあるべからざるをあらはれみたまひて、願をおこしたまふ本意、悪人成佛のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり、よて善人だにこそ往生すれ、まして悪人はとおほせさふらひき云々

此章は歎異鈔の骨目たる悪人救済の極致即ち悪人正機といふことを特更に、かどをたてし示したまひたのである、若第一章の文句のうちにて、彌陀の誓願不思議にたすけられまいらせて往生をとぐるなりと信ずる點、即唯信心を要とすとするべしといへることを第二章に説き延べたまひたるものとすれば、此章は罪惡深重煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてましますといふ點、即ち惡をもあそるべからず彌陀の本願をさまたぐるほどの惡なきがゆへにといへることを示したまひたのである、嘗て全國典獄會議のとき當時の大臣演説に「善人をもて往生を乞ふいはんや悪人をや他力救済の門戸は在因の上に開けり」といふことがありました、實に適切なる教訓であります、如來本願の本意は惡しきもの程益々救済せんと

ふことの難有き、我等極惡最下の凡愚は相帥めて深く自ら悔責して大悲矜哀の招聲の下に悲泣信樂するの外はない、此章は其大悲矜哀の極所を示されたのである、曰く

善人をもて往生を乞ふ、いはんや悪人をや、しかるを世のひとつねにいはいはく悪人なを往生す、いかにいはんや善人をやと、この條一旦そのいはれあるにたれども、本願他力の意趣にそむけり。

前章に反覆せる如く實に本願は慈悲大悲の親心である、そして其親心は善き子供のとすら日夜心配したまふもの、まして況んや我等惡しき子供のとほ片時も忘れたまはぬが御親の眞情である、かく承れば實に喜ばずには居られぬ、しかるに世の人は誤りて悪人なを往生す況んや善人をやといふ、一應さけば尤の様なれども、夫は善根の力で往生する人のことである、其時は善人が先づ往生せねばならぬ、故に悪人ですら往生するもの況んや善人をやと云ふのも無理はない、併夫は自分の善根の力で往生する自力の場合である、しかるに今は全く他力の御恵みにて救はるゝ場合ゆへ善人ですら救はるゝ、況んや悪人は猶救はるゝといふ次第である、他人の間柄なれば惡しき人すら世話する、況んや善き人は見捨てぬといふであらう、併親が子に對する情ならば善き子すら忘れぬもの、惡しき子とはとも／＼忘るゝことが出来ぬが情である、涅槃經に阿闍世王に對して耆婆が説きて曰く、譬へば一人にして七子あらんに此七子の中病に遇へば父母の心平等ならざるに非れども然も病ある子に於て心則ち偏へに重きか如し、如來も亦爾り、諸の衆生に於て平等ならざるに非されども罪あるものに於て

の思召である、歎異鈔こそ實に在因の人に向ての唯一の德音である、かく言へば在因ならざるものは、はや在因の人よりも罪輕きが如く考ふるならば大なる誤である、存覺上人は曰く、耳四郎は至極の罪人惡機の手本といひつべし、今時の道俗たれのともがらかこれにかはるところあらんや、をよその身にをいて内に三毒をたゞへ、ほかに十惡をつくる、つくるに強弱ありといへども三業みなこれ造罪なり、をかすに淺深ありといへども一切こと／＼これ忘惡なり、しかればたれのともがらか罪惡生死の名をのがれん、いづれのたぐひが煩惱成就の體にあらざらん、つくるもつくるもみな罪體なり、おもふもおもはざるもこと／＼忘念なり、しかるに當世のひとみなおもへり、わがみにさほどの罪業なければ本願にすくはれなん、わがころにさほどの忘念なければ往生の願にははたしつべしと、このおもひしかるべからず、そのゆへはたとひ身心ともに起惡造罪なくとも念佛をたのますは極樂に生じがたし、たとひ逆謗闡提なりとも願力に乗れば往生うたがひなし、罪業の有無によるべからず、本願の信不信にあるべきなり、そも／＼かの耳四郎は山賊海賊強盜竊盜放火殺害かくのごとき惡行をもて朝夕の能とし、妻子をたすくるさへとしけり、なかんづく殺害にきては、いく千萬といふことをしらざりけるとかや、かゝるものゝそのわざをしつゝも、念佛を修し、本願をたのみける、ことにたうともはんべるものかなと、嗚呼尊き本願なる哉、尊き念佛なる哉、耳四郎の如き我等をかかも哀みたまふ大悲の辱じけなき、すべて罪惡を包藏せる我等の身の上にかくも憐憫の涙を注ぎたま

心偏に重し、放逸の者に於ては佛則ち慈悲の念を生ず、不放逸のものには心則ち放捨すと、即是である、更に一層適切なる實例を示さば國家の費金を献上して賞を賜はるときは、かく僅かばかりを献じたる貧民すら賞を賜はる、況んや多額を献じたる富豪をやといふべきである、しかるに若し年凶饑にして朝廷内帑を割きて下萬民を賑はしたまふときは必ずやかく猶糧食あるものすら恩賜を與へたまふ、況んや今日食ふに米なきものに於てをやといふべきである、又陛下群臣に對して論功行賞あらせらるゝときはかくの如き微功のもの猶勳を賜ふ、況んや大功なるものに於てをやといふべきである、然るに陛下仁慈の大御心より特赦を賜はる場合ならば必ずやかく輕き刑罰のものすら猶特赦を賜ふ、況んや重罪一命なき枯骨憐むべきものに於てをやといふべきである、是が實に朝廷が細民に對して賜はる給恤、陛下が罪人に對して注がせらるゝ特赦仁慈の大御心である、今慈悲大悲の本願が實に此本師法皇の御心である、此に於てや我等惡しき子、罪の民なれども聖人の常に宣ふ如く、孝子の父母に歸し、忠臣の君后に歸する勸靜已に非ず、出沒必ず由あるが如く、唯如來哀愍の思召のまに／＼信順し奉るの外はない。

猶我等は此の如き慈悲の親心の奥底を叩きて示されたる聖人の御教化を輕々しく受けてはならぬ、黒谷上人傳の中に上人の常に仰られける御詞の一に曰く、

罪は十惡五逆の者なほむまると信じて小罪をもをかざじと思ふへし、罪人なをむまる、いかにいはんや善人をや、行は一念十念むなしからずと信じて、無間に修すべし、一念

なをむまる、いかにいはんや、多念をや、
 と、是が浄土宗の人々が法然上人の御教化なりと思ふて書き
 とめられた御言である、勿論法然上人は邪見に陥らぬやう罪
 を犯すなとか、怠らぬやうに念佛を喜べと仰せられたことも
 ありたるべけれど、かく小罪をも犯してはならぬ、善人ほど
 助かる、念佛は無間に修せよ、澤山稱ふる程よいといふ様な思
 召てはなかつたであらう、夫について思ひ出すは聖覺法印の
 唯信鈔の御言である、

よの人つねにいはいはく、佛の願を信ぜざるにはあらざれども、
 わが身のほどをはからず、罪障のつもれることはおぼ
 く、善心のおこることはすくなく、こゝろつねに散亂して
 一心をうるることかたし、身とこしなへに懈怠にして精進な
 ることなし、佛の願ひふかशीといふとも、いかてかこの身
 をむかへたまはんと、このねもひまことにかしこまにた
 り、憍慢をおこさず、高貴のこゝろなし、しかれども佛の
 不思議力をうたかふとがあり、佛いかにばかりのちからま
 ますとしりてか罪惡の身なればすくはれがたしとあもふへ
 き、五逆の罪人すらなほ十念の功によりて刹那のあひだに
 往生をとく、いはんや、つみ五逆にいたらず、功十念にす
 ぎたらんを、つみふかくはいよ極樂をねがふべし、
 不簡破戒罪根深といへり、善すくなくばます彌陀を念
 ずべし、三念五念佛來迎とのたまへり、むなく身を卑下
 して、こゝろを怯弱にして佛智不思議をうたがふことなか
 れ、
 つみ五逆にいたらず功十念にすぎたらんをやといへば、悪人

鈔には佛智不思議の救済を示すために用ゐられたる語が黒谷
 傳では自力作善の功力を勵ます爲の語となつてある、而し
 て此黒谷傳の一語々に暗合して嚴しく聖人が戒めたまひた
 る御教化が口傳鈔の最終の三章である、曰く、
 一如來の本願はもと凡夫のためにして聖人のためにあらざる
 事

本願寺の聖人黒谷の先德より御相承とて如信聖人おほせら
 れていはく、世のひとのつねにあもへらく、悪人なをもて
 往生す、いはんや善人をやと、このこととをくは彌陀の本
 願にそむき、ちかくは釋尊出世の金言に違せり、云云
 一つみは五逆法むまるとしりて、しかも小罪もつくるべか
 らずといふ事、
 世なじき聖人のおほせとて先師信上人のおほせにいはいはく、
 世のひとつねにあもへらく小罪なりとも、つみををそれ
 もひてとめはやとあもは、こゝろにまかせてとめら
 れ、善根を修し行せんとあもは、たくはへられて、これを
 もて大益をも得、出離の方法ともなりぬべしと、この條眞
 宗の肝要にそむき、先哲の口授に違せり云云

一念にてたりぬとしりて多念をはげむべしといふ事、
 このこと一念も多念もともに本願の文なり、いはゆる上盡
 一形下至一念と釋せらるゝこれその文なり、しかれども
 下至一念は本願をたもつ往生決定の時尅なり、上盡一形は
 往生即得のうへの佛恩報謝のつとめなり、そのこゝろ經釋
 顯然なるを、一念も多念もともに往生のための正因たるや
 うにこゝろにみたす條すこぶる經釋に違せるものか云云

なほ往生す、いかにいはんや善人をやと、言語は似たれども
 意味は全く反對である、釋尊が阿闍世王に對して説法の時告
 けて言はく、一切衆生の所作の罪業に凡二種あり一には輕、
 二には重なり、若し心と口とに作るを名けて輕と云ひ、身
 と口と心とに作るを名けて重と爲す、大王心に念ひ口に説て
 身に作さざれば得る所の報輕し、大王昔日口に殺せと勅せず
 但足を削れと言へり、大王若し勅せしかは侍臣立るに王の首
 を斬らん、坐の時乃ち斬るも猶罪を得じ、況んや王勅せざるを
 やと、是阿闍世王に對して猶汝の罪は輕いと言ふて深き煩悶
 に陥れるを慰藉し如來の救の深きことを示したまひたのであ
 る、今聖覺法印も罪深ければ往生出來ぬと悲めるものに對し
 て、つみ五逆にいたらず功十念に過ぎたらんをやと慰めて他
 力念佛の尊きことを示したまふのである、ゆへに次につみふ
 かくはいよ極樂をねがふべし、善すくなくばます彌
 陀を念ずべしと勸められたのである、法然聖人の宣へる罪人
 なをむまるいはんや善人をや、一念なをむまるいかにいはん
 や多念をやといふも此聖覺法印の言と同意味であつたのであ
 ろうと思ふ、しかるに黒谷上人傳には全く自力律法のはから
 ひに陥りて、罪は十惡五逆なほむまると信じて小罪をも犯さ
 ずと思ふべしと戒めて、罪人なをむまる況んや善人をやと自
 力作善をすゝめ、行は一念十念むなしからずと信じて無間に
 修すべしと自力念佛のはからひを打立て、一念なをむまる況
 んや多念をやと、其偏數の多少を勵ましたものである、かく
 の如きことを法然聖人の仰せらるゝ筈がない、嗚呼言語は同
 じくとも唯信鈔と黒谷上人傳、心は黒白の相違がある、唯信

而して此初の一章が此歎異鈔の第三章と全く同一の御教化で
 あります、實に法然上人の御弟子三百八十餘人の中、本願他力
 の親心は我等凡愚底下の罪人を救はんとの大慈大悲なりとい
 ふことを御頂きなされた方は聖覺法印を初め五六人に過ぎな
 かつた、而して我親鸞聖人は特に其誤り易き點に、かどを立て
 り、自ら如來大悲を頂きたまへる儘を、かく噛みて含めるや
 うに御示し下された、我等幸にかくの如き聖人の御教化を直
 々承るを得たるは實に千載の一遇と遠く宿縁を慶はねばなら
 ぬ、そして聖人の後にも亦法然上人の後と同じく自力律法主
 義の起つたことは序説に述べた如く、二十一箇條中に罪は十
 惡五逆生ると信知して而も小罪も犯すべからずとあるのを見
 ても分かる、しかるに歎異鈔、口傳鈔の御教化は亦此疑の雲
 をも拂て隈なく他方本願の佛日を仰がしめたまふこと、多生
 億劫にも値遇し難き殊恩を感謝せねばならぬ。

問曰、持戒の行者の、念佛の數遍のすくなく候はんと、
 破戒の行人の、念佛の數遍の多く候はんと、往生の後の位の
 淺深、いづれか進み候べきや、
 答、居てまします處を押へての給はく、此の處のあるに
 とりてこそ、破れたるか破れざるか云ふ事はあれ、つや
 ながらん處をば何とか論ずべき、末法の中には持戒もなく破
 戒もなし、唯名字の比丘計りありと、傳教大師の末法證明記
 に、書き給へるうへには、何と持戒破戒の沙汰をばすべきぞ、
 かゝる平凡夫の爲に、破し給へる本願なればとて、いそぎ
 名號を稱すべし、

嘆 咏

瑤 絡

左 千 夫

(河東碧梧桐氏が陸奥淡虫温泉に在るに寄す)

群肝の心もゆたに朝湯出て、四方の雪山見るらむもほゆ

ちり砂子吹きまく都達のきて雪山の間の湯にこもるかも

來訪せんと云ひこせる寺田密氏がさほりありて來らざりけるに

大丈夫が朝尻か、げ席拂ひ庭も清めぬ君待つまげに
晝過ぎの人待つ庵に徒らに木の影動き釜の音すも
神のめぐみ全けくあらば亦の日を契れる人に便宜賜はれ

藤真氏が酒宜しきを祝して

も 久方の風吹き變り雪しぐれ晴れゆく如く癒ゆる君か

清 涼 光

甲 之

みなぎる月の光

松かけ 砂にしく。

空のくま 雲わき起り

波に浮く 木尾島かけ。

波の音 遠き沖へゆ

夜べのあらしの 名残運び來。

しがひびき ぼがらかに

打ちかへし かへしては

よせて へだての 間こそ無けれ。

すみとほる 朝明け空

冷たき風 夢の如く

仰ぎ見る 空近し。

窓の下 玉松が

ほつ枝の うす雪は

常世の 風のはなかも。

都より遠に訪ひ來し友にだに言問ひも得ず病み臥せりきを

雪霜のとどし早過ぎ春山に打群れ行かむ日待つ吾は

すこやかに君か杖振り見廻るを山の草木も待ち戀ふるら

し (藤真氏は山林家なり依て此作有り)

◎正誤 前々號「千葉の一夜」の最後の歌
初句「しみさぶる」は「しみさぶる」の誤



ゆららこぼれむ

光に動く 物よろづ。

かがやく星 いざよふ光。

ひな手かさし 若子が

進む足 ああはかなきかな。

朝日 出てむとす。

汝が母の 胸のかくれが

暗さにぞ 汝が光 うつくしき。

忘れず とこしへに

汝が光。明時近づく

別れむ さらば。

み名よび 春花の

みち足る 言絶ゆ

み國へあゆむ あゆみのひびき

歌こそひびけ

とはの命を 若子が

胸の血しほに みなぎらすべく。

紹介

小泡十種

三宅雄二郎氏著

三宅雄二郎氏の文名は既に紫に四海を賑す、吾人は今更茲に云ふ所の要を見ず、本書は氏が幾筆十種を集めたるものなり、先づ著者の例言に曰く「此れ若泡のみ、泡の小なるもののみ、泡は空に歸するも、空と同からず、暫時ながら實を具ふ、流れてなほ頼まるゝ所以」と。卷を十種に分ち一編毎に同一種類の文を配し、問々一種にして敷衍に別たれたるあり、編纂の筋裁既に凡趣を脱す。而して其内容を敷ふれば、或は俳法を論ずるあり、或は草木花鳥を品評するあり、或は試験の制度を考へ、或は田園の情趣を説き、或は神佛を比較し或は漢學を傍助し、或は歐米の文物を紹介し、詩人を論ずるあり、英傑を論ずるあり、カライル來れば閑遊も來り、頼朝有れば行長もあり、漢文あり、英文あり其の多趣多様な讀者をして頁を移る毎に無量の情趣に我を忘れしむ。而かも皆な氏が豊博なる識見と確實なる常識に基きたれば一句の駄言なく一語の「ゆるみ」無く、殊に吾人の最も快とする處は洒々たる現下の街巷的著作に反し本書の獨り清新一毫の厭味なき點にあり。蓋し現時の文壇にあらざりては決し爲しうべからざるの書、若し夫れ文章の妙味に至りては吾人批評の限にあらざり、圓熟の極に達して字々金玉の響きあり、吾人は當に世の好文家のみならず一般文字ある人に向て其必讀をすゝむ。頁數二〇九、定價金四十五錢、發行所、小石川原町、鶴聲堂。

靈海新潮

海老名正氏著

著者海老名氏は基督教界の名士として都下青年男女の間に最も聲望あるの人、本書は氏が毎月雜誌「新人誌」上に掲載せられたる講話十九編を集めて一冊としたものなり、今其の大體を一覽するに、健全なる人生觀、以下五編は主として基督教の見地に立ちて人生を觀察し、「吾人の出世間的世活以下六編は正面よりして基督教の信仰を宣傳し、「放蕩子」以下四編は其信仰よりして來る法則を教え、最後の「家庭の宗教」我が女性觀及び「貞操論」其二の四編は特に女性に對し滿腔の同情を注ぎ其人生にもたらせる使命の偉大なるを諷刺せるもの、自序に曰く「現代の青年は未だ會て遭遇しなかつた難問に煩悶しつゝある、彼等は此難問に臨んで奮闘し負傷し死亡し敗北し戦勝しつゝある、謂ふ勿れ女學生の墮落と、彼等は最も憐むべき境遇に遭遇しつゝあるではないか、謂ふ勿れ青年の墮落と、彼等は自ら新なる靈性を發揮せざる可らず、新なる靈能を自覺せざる可らず、新なる靈海の潮流を作さざる可らず、予は之を想ふて同情に堪へざるのである云々」と、以て本書の精神の那邊に存するかなを知るを得べし、快辨縱橫殆んど讀者をして思

時報

安中佛教青年會

上州安中佛教青年會は年々二月十五日涅槃會を行ふ慣例にて昨年も之に出席したりしが本年も亦之に出席せり、當日は各宗聯合して午前日清日露戰爭忠死者追悼會ありて有力者皆會合し午後涅槃會を兼ねて演說會を催ふし夜亦再び開會せり、徹頭徹尾信仰問題を論じて質験の味を披瀝せり、同地は基督教も盛なる地にして且つ佛教も多年其基礎を固うせり、殊に近時信仰を求むるの氣運著しきは大に賀すべし也同青年會の地方に對する感化洵に感謝すべき也。

横須賀求道會

横須賀眞宗各寺僧侶諸氏は本年より先づ自己の信仰を確立し、法喜慶讚の爲め、聯合を以て修養會を開かれ、吾人は毎月之に出席して自督を陳し、共に歡喜鑽仰するの好因縁を得たり、何れも眞率の告白、中心の懺悔覺えず涙を催ふし心を寒からしむるものなり二月廿七日に於て先づ自己入信の實験より信卷阿闍世王入信の文を味ひ三月廿七日に於て來世眞證の味より自然法爾章につきて佛智不思議を讚嘆せり、而して修養會を終りたる後説教場に於て一般信者に向て講話を爲し、日西山に傾く頃暹子鎌倉の暮色を眺めつゝ歸京するを常とす、かく僧侶諸氏が先づ自己の求道獲信を本として共に

考の餘地なからしむ。定價八十錢、發行所、東京區、金尾文淵堂。

人生之要路

文學博士 村上 專 精師著

我が教界の博學として村上博士の名は既に讀者は知悉し給ふべし、本書は博士の座談を若上行波氏の編輯せられたるもの、一、余の宗教觀二、余の人生觀より最後佛陀の實在、佛陀の救済に至る迄凡て三十編、每編之をやるに明快なる言文一致を以てし理論亦頗る明晰なれば何人と雖も了解に苦まざるべし、今本書の項目中其著しき者四五を擧ぐれば曰く、人生の基礎、奮闘的生活、活動的生活、大衆的活動、活動と衛生、獨立的精神、運命と現象、祈禱無功德、成功の秘訣、社交禮十則等、而して此項目の顯はせるが如く佛陀の理想に基きて人世航海の要法を教ゆるが實に本書の眼目なり。世の奮闘的生活を希望せる青年、佛陀に志篤き人には一讀を要すべし好著なり、印刷亦頗る鮮明(定價金四拾錢、發行所、本郷區春水町、森江分店)

自信錄

村上 專 精師著

同じく村上博士の著作にして鶴聲堂の發賣にかゝり、彼の「小泡十種」と同形同質の書冊たり、劈頭博士の自序に曰く「信仰は自由のものなれば初めより或る教條の本に服従して成立すべき筈のものではない、何等の教條にも壓抑せられざる自由自主の身たる事を得て初て成立すべきである、然らざれば眞の信仰ではないといふことも、恐くは過當の言てはあるまいと思ふのである、而して今や吾人幸に何等の教條にも服従せざる義務あることなき、眞個自由の身たることを得て、遂に佛陀の全約を一瞥するに、自巴の信仰は單に自力主義のものにあらず又單に他力主義のものにあらず、自力他力相關の上に成立することを得たのである、蓋し吾人既に自由主義に依つて得たる此信仰は、今や一轉して服従主義のものとなつたのである、即今後各方面よりして種々の批難ある可きは固より豫期する所であるが、縱如何なる批難あるも他力を呼び起すものは我れの自力である、又我が自力を以て其効むなしからしめざるものは彼の他力である、故に吾人の本務は自力的策勵にありといふ所の信念は頑として動かぬのである云々」

信者を帥めんとせらるゝは實に眞面目なる風潮と云ふべし、各地若し此種の會合を起して、自策自勵したまはゞ何を教界の不振を嘆ぜん、是全く如來の加被力に出づるもの、洵に感謝に堪へざる也。

傳道日割

- 吾人は唯佛陀の御導きの下に與へたまふ御縁に従ひて慈光を仰ぎたてまつるの外なきなり、近頃會合多く且つ地方傳道の定まれる分を擧ぐれば左の如し。
- 三月廿一日午後一時 日本橋小傳馬町新高野山 九段佛教俱樂部第二求道會
- 廿三日午後二時 本郷森川町求道學舍
- 廿四日午前九時 本郷森川町求道學舍
- 廿七日午後一時 神田和強樂堂青年團
- 三十日午後二時 九段佛教俱樂部第二求道會
- 卅一日午前九時 本郷森川町求道學舍
- 四月一日午後一時 神田錦輝眞宗大學宗祖降誕會
- 同 午後六時 九段佛教俱樂部信行會宗祖降誕會
- 二 日午後六時 日本橋蠣殼町第二求道會
- 四 日午前午後 横須賀求道會
- 五 日午後一時 浦賀演說會
- 六 日午後二時 九段佛教俱樂部第三求道會
- 七 日午前九時 本郷森川町求道學舍
- 九日より十二日まで 二本松福島桑折白石等傳道
- 十三日午後二時 九段佛教俱樂部第二求道會
- 十四日午前九時 本郷森川町求道學舍

二十日午後二時 九段佛教俱樂部第二求道會
二十一日午前九時 本郷森川町求道學會

廿四日廿五日 越前吉崎參詣

廿六日廿七日 加賀松任地方傳道

廿八日 金澤議事會道友會釋尊降誕會

廿九日 第四高等學校校友會

五月一日より三日 歸郷

五日より十四日まで 讚岐高松佛教講習會

從て四月十九日土曜より五月十二日の日曜まで地方傳道中
は求道學會及び第二求道會講話休會す、

他山之石

本年は萬國基督教青年大會開會せらるゝに、つぎ各國代表者
來朝せられ、又救世軍ブラス大將も來朝せらるゝ由なれば吾
國宗教者は他山之石として親しく其施設を見聞するの好機を
得たり、而して來朝諸氏も亦傳道にのみ急にして日本精神の
陶冶及び佛教信念の精髓を味ふの機會を逸せざらんことを切
望するもの也。

▲求道學會日曜講話題

▲力の宗教 (二月三日)

▲本願の意義 (二月十日)

▲憍慢と弊と懈怠 (二月十七日)

▲謙敬奉行 (二月廿四日)

▲以和爲貴 (三月三日)

▲萬國の極宗 (三月十日)

▲利他の深義 (三月十七日)

▲第三求道會講話題

▲親の心 (二月二日)

▲力の源 (二月九日)

▲憍慢の者は信じ難し (二月十六日)

▲謙敬の者は入り易し (二月廿三日)

▲唯佛を信ぜよ (三月二日)

▲眞の謙遜 (三月九日)

▲眞の自信 (三月十六日)

▲第三求道會講話題

▲本願力 (二月二日)

▲遠慶宿縁 (三月二日)

本誌二月分遂に休刊に相成り

候段申譯無之不惡御用捨被下

度候 頓首

感想

和國教主聖德皇

親鸞聖人聖德太子を讚嘆して宜はく、「和國の教主聖德皇、廣大恩德謝しがたし、一心に歸命したてまつり、奉讚不退ならしめよ」と、嗚呼聖德太子は和國の教主也、日本の釋尊也、吾人親鸞聖人の奉讚を口にす久しかりしと雖此一句の中、實に無限の意味含蓄せるものあるを悟らざりき、吾人備々此一句を味ふに廣大無限の一大宣言たるを感ずるもの也。夫れ聖德皇太子の洪徳人の爲に知られざりしや久しかりき、維新前、儒門の起りてより信念全く地に墜ち皇太子の聖徳を了解するあたはず、遂に皇太子の聖の聖たる所に至りては少しも其光輝を仰ぐあたはざるのみならず、却て根本的誤解の立點となるに至れり。嗚呼太子の世に知られざるや久しかりき、而して今や猶其眞面目を知るもの鮮し。我幸に親鸞聖人の指導によりて皇太子の恩徳を感ずるを得たり、而して遂に和國教主聖德皇の一句を拜誦するに無量無邊の光明赫々として一世を照耀したまふの概なくんばあらざる也。

近人動もすれば言ふ、日本は宗教に適せざるの國也と、何を自ら言たるの甚しき、或は印度に釋尊あり、支那に孔子あり、而して日本には此等の人なしと、嗚呼此言を爲すの人は日本に聖德太子あるを知らざるの人也。近時青年の間信仰漸く起るに及び信仰的人格を敬慕するの情益々熾んなり、而して此渴仰の念を満足せしむるの人格を之を我國宗教史上に求むるに決して其人に乏からず、然れども、其聖の聖なるものに至りては皇太子を措きて之を他に求むべからず。嘗に皇太子が日本佛教を興隆したまひしが爲に之を和國の教主と稱讚し奉るのみならず、寧ろ信仰實驗の意義に於て、皇太子は日本に於ける大聖釋尊也と讃仰し奉るの至當なるを認めずんばあらざる也。

古來皇太子の傳頗る夥し、而して一生奇蹟を以て満たさる、之が爲に今人或は其奇蹟を棄て、其偉績のみを採りて以て太子を信ずるの材料に供せんとす、蓋し皇太子の一生は富嶽の聳ゆるが如し、八面玲瓏として萬人の崇拜するを得べし、故に其偉績のみを尊崇するも、確かに太子の世諦に於ける面目を仰ぎ得べし、されど、此の如き世諦の光輝を發揚したまふ所以のものは眞諦の源淵より流出せることを忘るべからず、是實に皇太子の眞面目にして此點に至りては信念の進むに隨て益々其偉大なるを認むべし、此に於てや從來信仰なき世に於て荒唐不稽として閑却されし奇蹟は、却て一種清新の光明を齎らして益々人格の非凡なるを渴仰せしむるに至らむ、然れども、吾人は必しも奇蹟を以て太子を莊嚴し去らむとするものにあらず、若し眞諦の源淵に溯らば徒らに凡夫の淺智を票準として奇蹟を斥くべからざるを言ふのみ、吾人の最も讚仰せんと欲するは先づ聖德皇太子に於ける眞諦の第一義に在り。

聖德太子は實に和國の教主也、日本の釋尊也、吾人は釋尊が迦毘維城の悉達多太子として生れたまひたると聖德太子の御位置と頗る酷似したまひたるは吾人少からざる靈感の涌き出づるを禁し得ざる也、而して共に皇位に登らずして精神的大法皇として萬靈を救済したまひし亦其軌を一にす、但し其異る所は釋尊は出家入道して八相成道の跡を履きたまひしと雖聖德太子は儲君の位にありて攝政の權を執り世諦の中にありて眞諦の面目を發揮したまひし點にあり、是れ聖德太子が形式に於て釋尊と頗る趣を異にしたまふ所にして、亦日本佛教が印度佛教と其色彩を異にする根源也、聖德太子の靈告に、日域大乘相應地と云へるは正に此特色を説破し盡して餘蘊なし、蓋し是和國教主聖德皇といへる文字と好一對として日本佛教の票幟也。

吾人は此に於て聖德太子の一代を貫徹するの中軸を發見したり、然れども吾人は此一點に於て讀者諸君の三思を希はさるべからず、世人動もすれば言ふ、日本佛教は皇室より興隆せられたり、世間法の上より行はれたり、其意恰も皇室の權威を以て法を弘め、先づ世間道德の爲に宗教を信じたるが如く思考するもの多し、此の如きは信仰の權威より尊さを知らず、出世間の世法より高さを知らざるもの也、否九五の尊さを以て専ら三寶に歸依したまひ、人倫道德は信仰の源淵より自然に流れ出づるを知らざるの罪也、聖德皇太子は斯の如く世諦中にありて眞諦の光明を發揮し、眞諦の光明を以て世諦を照耀したまひし

根源也、古今或は眞諦を離れたる世諦のみを説きて宗教の眞面目を得たりと考ふるものあり、此の如きは未だ宗教の微光にだも觸れざるもの、何によりてか人生を救ふを得、若し眞諦の光なくして世諦に走らば、遂に名利五欲の満足に終らむのみ、然れども亦世諦を離れて眞諦を發揮し、發揚し得べしと信ずるの人は亦宗教の職分を忘れたるの人なり、此の如きの信仰は遂に樹下石上深山幽谷に法を修するに宜しからん、或は遂に小乘自度に止りて終に大乘攝受の眞信仰に達する能はざらむ、此點に於ては出家入道の信仰よりも寧ろ家庭存俗の信仰の意味の深長なるを覺ふ、是れ和國の教主聖德皇の一代を貫徹する中軸日域大乘相應地の眞意義也。

聖德皇太子の聖傳は他日慎重に研鑽せざるべからず、吾人は大體を徹觀して其聖德を鑽仰せむかな、吾人は以爲らく太子傳は釋尊の傳を日本的世俗的に實現せられたるものにして實に佛陀の光明の人格化されたる也、近時久米邦武氏太子實錄を著して太子の偉績を傳ふること詳かたり其中に、太子麻戸に生れたまひりと云ふことを初めとして頗る基督傳に似たる所あり、或は當時其思想の混入せしにはあらざるかと、揣摩も此に至りて噴飯に堪へざれども、却て是れ太子傳が如何に宗教的なるかを示すもの也、若し基督傳中の奇蹟を味ふの人は必ず聖德太子傳の奇蹟に無量の味を見出さるべからず、久米氏が一概に奇蹟を斥けられたるは氏か普通史眼を具ふるも宗教信仰眼を具へざるが爲のみ、太子傳にして其信仰を除き去らば所謂眞諦を離れかる世諦となり、太子傳の特色は眞諦を離れざる世諦の實現にあり。

太子入胎、誕生、東向合掌、佛を初めとして日羅禮拜して敬禮救世觀音大菩薩傳燈東方粟散王と言ひしが如き生ける佛院の傳記なり、吾人は和國の教主聖德皇として恭敬尊信するの外なき也、かくの如く眞如一實の都城より權化したまふこと一點の疑を存せずと雖、跡を人生に垂れかまふの上に於て深く太子行跡の意義を味はずんば人生の上に活躍する信仰の力を認むる能はざるに至らん、而して吾人か先づ着眼すべきは太子の修行地即ち修養時代也、大聖釋尊と雖十九歳出家を初として宗教的實驗の跡歷々として徴し得べし、而して三十五歳の降魔成道は明らかに人間界の光明の根源也、而して古來の高祖何れの宗派と雖、先づ中心實驗の一大苦境を過ぎ來れる時代なかるべからず、而して聖德太子傳中、何れの時に此實驗を経たまへるを傳へ

吾人私かに以爲らく是れ吾人の最も深く味ふべき點也。夫聖德太子は釋尊の如く出家入山したまふことなし、此に於て其時期を畫して修行時代を示すことあたはざるも物部蘇我中臣の諸權臣か互に相軋して暴逆に至らざるの間に處して深く人牛の風波險惡の裡に一大實驗を重ねたまへる所、吾人が到底想像し得べからざる一大修行時代を見出すを得べし。蘇我氏の物部中臣兩氏を滅せるの間に處したまへる、又馬子か鼻屎穴穢部皇子及皇峻天皇を弑する間に處したまへる皇太子の苦心夫れ淺許ぞや、後人太子か佛を信じたまへるを以て志を馬子と一にせられたるが如く考るは毫も太子の御心を知らざるもの也。而して若し修行時代を畫し得べくんば推古天皇の朝太子攝政の任に當りたまへる後を以て太子の實行時代と稱するを得べきか。皇正しく所信を以て治世に活用したまひしもの也。かく聖德皇太子の一代が其修行時代と實行時代とを問はず、すべて世俗中にありて飽きて眞諦の光明を發揮したまひしを見るべき也。

太子一代の精神は如來清淨眞實の第一義に安住したまひて之を世諦の上に施したまふに在り、皇太子か如何なる理想を以て修行し、如何なる安心に達して救済したまひしか、吾人は老儒島田菴根翁の教によるに皇太子の精神は勝鬘經十大受及三大願是也と、是實に味ふべきの言、皇太子自ら佛子勝鬘と稱して其意を示したまへり、而して太子自ら之を講じたまふこと一度、御製の疏今に傳ふ。吾人は此に十大受三大願を列擧して以て太子一代の行跡に照すに其淵源するところ深きを仰ぐべし、曰く、

世尊我從今日乃至菩提、於所受戒、不起犯心。

疏に曰く、小乘の戒法は但、身口を制して心を制せず、今又更に其先に行ふ所を精ふして、清淨の極を明らかにする也、故に初に在る也、と、蓋し是大乘戒の至極を顯はしたまふものと謂つべし。

世尊我從今日乃至菩提、於諸尊長、不起慢心。

疏に曰く於諸尊長不起慢心とは三處(君父師)を尊と爲し、兄秩を長と爲す、於諸衆生不起慢心とは通して含識の類を言ふ、然るに尊の上には慢を止め、卑に於ては慢を禁する所以の者、解するに三種あり、一に云く、凡そ人の情は上に於て等しからん

ことを樂ふが故に慢を起し、下に於ては逼らんと求むるか故に慢を起す、二つながら皆非道なり、ゆへに尊の上には慢を止め卑の上には慢を防くなり。二に云く尊の上には多く慢を生じて慢少し、何んとなれば即ち尊者は其高貴を馮て好て群下を陵ぐ、故に下は多く慢を生ず、而れども其德敬すべきが故に慢生ずることは少し。卑の上には慢多く生じて慢は少し、何となれば即ち、已より下に在るが爲に理として自ら陵ぐ可きが故に、慢を生ずることは即ち多く、縦横に我に隨ふが故に慢を生ずること少し、言ふこゝろは今尊の上に於てすら少しの慢を起さず、況んや卑の上に多く慢を生ぜんや、又卑の上にすら尙少しの慢を生ぜず、況んや尊の上に多くの慢を生ぜんや、是皆輕きを擧げて重きを況する也。三に云く、尊長は是敬すべきの境、慢と敬と相違するを恐る、故に尊の上に慢を止む、卑は是慈むべきの境、慢と慈と相違せるを恐る、故に卑の上には慢を止むと、嗚呼皇太子の心を用ゐたまふの深き此釋を以て徵すべし、太子か君父師兄に事へ、下萬民を慈みたまふの情油然而して文字の上にあらばる、憲法十條慢を戒むるの教是より來る。

世尊我從今日乃至菩提、於他身色及外衆具、不起嫉心。

疏に曰く、他に於て嫉を起さず、自に於て慳を起さざるを言ふ、見つべし憲法十四條嫉妬を戒むるの教是より來る。

世尊我從今日乃至菩提、不自爲已受蓄財物、凡有所受、悉爲成熱貧苦衆生。

疏に曰く不自爲已受蓄財物とは止善を明す、凡有所受より以下は行善を明す、不自爲已行四攝法とは止善を明す、爲一切衆生より以下は行善を明す、以無愛染心とは謂く無貪心なり、無厭足心とは無瞋心なり、無礙心とは無癡心なり、又云く以無愛染心とは愛見の悲を以てせず、若し愛見あらば即ち化道漏を爲す、亦生死に於て厭足あり、且つ化物碍あり、又云く、以無愛染心とは凡夫に同せず、無厭足心は二乘に同せず、無礙心とは大士に同するを謂ふと、是皆太子の傳中に實現せられたる所、太子經を講して賜はる所皆法隆寺中宮寺等に納れ、且つ自己の所領を皆三寶に寄附したまふ皆是より來る。而して布施、愛語、利行、

同事の四攝法皆衆生の爲にしたまふ、即太子、膳妃の家庭の如き同事攝にして愛見の悲にあらず、無染清淨の居士の莊嚴なり、
三骨一廟皆此眞諦より顯現するものと謂つべし。

世尊我從今日乃至菩提一若見孤獨幽繫疾病種種厄難困苦衆生終不暫捨一必欲安穩以義饒益、令脫衆苦然後乃捨、
疏に曰く、若見孤獨より己下は止善を明し、必欲安穩より己下は行善を明す、少ふして父なきを孤と曰ひ、老て子なきを獨と
曰ひ、囹圄に在るを幽と曰ひ、枷鎖有るを繫と曰ひ、刑惱を疾と曰ひ、疾の甚しきを病と曰ひ、我に在るを厄と稱し、彼に談
るを難といふ、自ら聲するを困と曰ひ、外より迫るを苦と曰ふ、以義饒益とは義は猶理のごとし、理を以て十苦を濟ふ也と。是
四天王寺の敬田、施藥、療病、悲田の四院を建立したまひし所以、罪を宥め貧を恤ひ、哀々の情片岡山の飢人に衣を賜ひ、且
つ厚く葬りたまふ眞精神なり。嗚呼今時、皇太子の御心を奉戴するもの、社會救濟の業殆んど數ふべからず、實に慚愧に堪へざ
る也、終不暫捨とは救濟の念一點も緩ふすべからざるの切實なるの所、令脫衆苦然後乃捨とは是飽まで救ひ盡さずんば止ま
ざるの誓願、嗚呼我等幸に此悲願に救はる、冀くば世の多くの苦惱の人をして此悲願に遇はしめむことを。

世尊我從今日乃至菩提一若見捕養衆惡律儀及諸犯戒終不棄捨一我得力時於彼彼處見此衆生應折伏一者而折
伏之應攝受一者而攝受之何ヲ以故以折伏攝受故令法久住法久住者天人充滿惡道減少能於如來所轉法輪而得
隨轉一見此利一故救攝不捨。

疏に曰く、援苦因に就て亦止と行とあり、若見捕養より以下は止善を明し、我得力時より以下は行善を明す、外に求むるを捕と
曰ひ、内に苦ふるを養といふ、衆惡律儀といふは謂く十六の惡律なり、涅槃經に見へたり、及諸犯戒とは其本誓に違する者を
言ふ也、惡律儀は發始より更に惡なり、犯戒は初善にして後惡なる者也、我得力時とは力に二種あり、一に勢力、二に道力な
り、於彼彼處とは若し善を行はずんば即ち諸の道皆閉て生死を流轉し、六趣に遷移す、所以に大士彼の處に於て皆此人を見
て重惡をは即ち勢力を以て折伏し、輕惡をば即ち道力を以て攝受す、惡を息め善を修すれば即ち聖化久しく住す、聖化世に住
すれば即ち善來り惡去る、故に天人充滿し、惡道減少し、道器既に増すれば、即ち佛の法輪恒に轉すべしと。嗚呼是れ太子の

理想益々高調にあらはれる所、即世の諸の惡しきものに對して終に棄捨せずと誓ひたまふ。是太子の御志なり、太子一代の
精神は此一句にあり、殊に我力を得ん時とは如何に適切の言ならずや。太子釋して勢力と道力なりと宣ふ、即ち太子既に眞諦
の道に達し、且つ攝政の職に當りたまふ、正に是れ力を得たまひし時にあらずや、而して太子の施設したまふ所折伏と攝受な
り、而して折伏も攝受も皆人をして正法に歸せしむるが爲のみ。太子十六歳守屋征討の軍後に從ひたまひしは確に折伏な
り、然れども若し太子にして力を得たまひし時ならば必ずや守屋を殺さずして正法に歸せしめたまひしならむ、惜哉當時未だ力
を得たまひし日にあらず、遂に之を滅さずして同化するあたはざりし也。然れども猶四天王寺を建立して、守屋の所領を寄附
し永久の救濟を祈りたまふ、其終に棄捨せずとの御志見つべき也。後世太子の馬子を誅せざるを見て難するものあり、然れど
も、遂に棄捨せずして攝受したまひしもの、太子在職三十年彼は全く太子の德に化せられ、救攝不捨の益を蒙れる也、而して
若し折伏若し攝受を以て人を棄捨せずして導きたまふもの、皆此如來の正法に入らしむるが爲のみ。

世尊我從今日乃至菩提一若見捕養衆惡律儀及諸犯戒終不棄捨一我得力時於彼彼處見此衆生應折伏一者而折
伏之應攝受一者而攝受之何ヲ以故以折伏攝受故令法久住法久住者天人充滿惡道減少能於如來所轉法輪而得
隨轉一見此利一故救攝不捨。

大過又見未來攝受正法菩薩、摩訶薩、無量福利受此大受。
疎に曰く、攝受正法、終不忘失とは既に攝受正法と云ふ、是れ八地以上の行なり故に他分行と云ふ、今勝鬘は迹七位に在り、
而して忘れずと言ふは八地以上を得んと願ふが故に正法を攝受するの心暫くも敢て忘れず、自ら待て忘れずと言ふに非ず、中
に就きて凡そ三行三欲あり、三行は是れ八地以上の行、三欲は謂く七地以還の欲なり、三行とは一には攝受正法行、二には大乘
行、三には波羅蜜行、七地以還も大乘ならざるに非るも、但、大義未だ顯はれず、何んとなれば七地以還は結を斷すること、二
乘と齊しくして、同く三界を出で、而して未だ八地以上の衆流を冥合して、更に異趣なきに及ばず、故に大義明らかならず、波
羅蜜は到彼岸と名く、七地已還も亦無相の彼岸なれども、但し未だ並び照すること能はず、故に波羅蜜の義も亦未だ彰はず、七

地以還を亦萬行を修すれども、一念の中、齊しきこと能はず、故に亦攝受の名を得ざるなり、ゆへに攝受と大乘と波羅蜜とは

皆八地以上に在て明すことを爲す、三欲は即是れ此三行を得んと願ふの心なり、故に七地以還も其有を許す也、而して此三行は皆是八地已上一心の上の用なり、但、義に隨て別の名を立つるのみ、故に若し法を忘失すれば即ち三行都て忘しぬ、三行既に忘すれば即ち三行の欲も亦皆忘するを云ふ也、波羅蜜の欲あるべし、略して無くする也、行を列するときは攝受を先と爲し、欲を列するときは大乘を初と爲す、是れ蓋し便を逐ふて大なる意なき也、隨所樂入より以下は行を失すれば即ち惡を起すことを明す、我見如是より已下不忘を結ふ、言ふこゝろは忘るゝときは禍を到す、忘れざれば福を得る、故に受けて忘れざるなりと、是れ實に眞諦の第一義を闡明したまひしものにして勝鬘跡を七地に垂れて八地已上の攝受正法、大乘、波羅蜜の妙境を渴望欲願したまふ求道心なり、吾人は此文字を拜讀し奉るに實に聖德皇太子が彼絶對の妙境より還來したまふ地位の大菩薩たること一毫の疑を存すべからず、吾人は此文字と相並へて上記の無愛染心、無厭足心、無聖德皇太子の眞面目を開顯したまふものと仰ぐべき也、淨心の菩薩、八地已上の淨心の菩薩と畢竟して寂滅平等法身を得ると云ふこと、無染清淨心、安清淨心、樂清淨心を有したまへる淨土還相の菩薩を想起せずんばならず、眞箇に是れ聖德皇太子の眞面目を開顯したまふものと仰ぐべき也、吾人は猶一言缺くべからざるものあり、皇太子が此の如く尊崇したまへる攝受正法とは何なるや、勝鬘經に反覆之を説き去り説き來りて遂に一乘章に至りて曰く、

佛告勝鬘汝今更說一切諸佛所說攝受正法、勝鬘白佛言善哉世尊唯然、受教即白佛言、世尊攝受正法者即是摩訶衍、乃至得一乘者得阿耨多羅三藐三菩提、阿耨多羅三藐三菩提者即是涅槃界、涅槃界者即是如來法身、得究竟法身者則究竟一乘、無異如來、無異法身、如來即是法身、得究竟法身者則究竟一乘、究竟者即是無邊不斷、世尊如來、無有限齊時住、如來應等正覺、後際等住、如來無有限齊、大悲亦無有限齊、安慰世間、無限大悲、無限安慰世間、作是說者、是名善說、如來、乃至若有衆生、如來調伏、歸依如來、得法律澤、生信樂心、歸依法僧、是二歸依、非此二歸依、是歸依如來、歸依第一義、是歸依如來、此二歸依、第一義、是究竟歸依如來、是實に行卷に所謂弘願一乘にして無碍の二道なるもの、此如來や實に究竟法身より來現する無限大悲の盡十方無碍光如來に非ずや、而して此如來に歸命し信樂するは三寶歸依の極にして究竟第一義なりとの謂に非ずや、若し行卷證卷眞佛土卷を取りて之を勝鬘經と對照し來れ、恰も符節を合せたるが如けん、而して其兩者思想の連鎖は正に覺菩薩の往生註論に外ならざる也、蓋し一家の私言に過ぎざるも大方識者の教を請ふ所也、此に至りて和國教主聖德皇の日域大乘佛敎の眞髓は正に是れ親鸞聖人の弘願一乘の眞宗に外ならざる也。

此の如く吾人は攝受正法の極致を究め、十大受の精神を顯示して之を皇太子の傳に對照するに一文一句活躍して、彼世諦百般の經營は此眞諦第一義の光明に淵源するを見る。而して勝鬘此十大受を實行するに三大願を以てす、是亦皇太子に於て實現せられたる者、彼十大受を實現せられたる洵に此願力によらずんばならず。曰く、

爾時勝鬘復於佛前發三大願、而作是言、以此實願安慰無邊衆生、

以此善根於一切生得正法智、是名第一大願、

我得正法智已、以無厭心爲衆生說、是名第二大願、

我於攝受正法、捨身命財、護持正法、是名第三大願、

爾時世尊、即記勝鬘、三大願如一切色悉入空界、如是菩薩恒沙諸願、皆悉入此三大願中、此三願者眞實廣大、嗚呼實に廣大なる三大願なるかな、數僅に三なりと雖、總ての願を盡し、總ての力を盡し、以て此已上に出つると能はざる也、第一願に曰く一切生に於て正法を得んと是れ歸依三寶常住の正法の智なり、疏に曰く常住の智也と、即是攝受正法の智也、太子既に衡山惠思禪師の前身を初めとして會し無量を生を經、又未來無量の生に於て、常に正法の智を得たまふ、而して其正法たるや畢竟念佛無碍の一道にして十方無碍人の生死を出てたまふの道ならずんばならず、第二願に曰く、我正法智を得已りて、無厭心を以て衆生の爲に説くと、是已か得たるの法を以て飽まで人に施して厭足なからんと誓ひたまへる也、嗚呼皇太子自ら正法を得たまひしのみならず、普く之を人に施さんと欲して如何に心を碎きたまひしかを仰ぐべし、蓋し利化の最要點は無厭足心に在り、宿縁に厚薄あり、根に利鈍あり、況んや衆生無邊にして盡し難し、無厭心を説くにあらずんば何を普く衆生を説く

を得ん。而して第三願に曰く我攝受正法に於て身命財を捨て、正法を護持せんと、是飽まで身を捧げて正法に殉せんと誓ひた

此に至りて吾人は太子傳中最も心を動すべき一大事實を切言せざるを得ず、曰く皇太子の子孫山脊大兄皇子鵠の宮に於て蘇

求道會館設立趣意書

求道會館設立喜捨金 受領報告(第十九回)

- 一金貳圓也 土佐國 島本直馬殿
一金拾圓也 東京 田中みな殿
一金五圓也 信濃國 黒澤ひさ子殿
一金六圓也 播磨國 秋山徳隣殿
小計 金貳拾參圓也
通計貳千參百拾圓參拾八錢也

右御寄附と恭ふし難有奉 存候茲に謹しんで奉感謝 候也

現時社會の大勢を察するに、國民に眞摯なる氣風頗る乏しく、益々信仰の必要を感じ、一般に道義の制裁弛み去りて

宗教界唯一の 中日新聞 中外日報

每號六頁

紙代、郵送費共 一ヶ月 三十一錢
一ヶ月 一圓九十錢
一ヶ年 三圓六十錢

創業第十一年に入り、既に二千餘號を發行す

教界に於ける當代知名の文士論客は、
擧げて我紙上に筆を振ひ光彩
常に陸離として蘭菊美を競ふ
の偉觀と呈す。

京都 粟田口 中外日報社
三條上 (特電九八九番)

建仁寺管長默雷禪師述

中外日報社編纂

默雷禪話 新刊

▲菊版二百五十頁頗美本 ▲默雷禪師寫真版挿入
▲東京秀英舎印刷頗鮮明 ▲定價五十錢、郵税六錢

默雷禪師は、明治禪門の泰斗、心靈界の明星也、本書は曩に我が中外日報紙上に連載せし「默雷餘韻」を訂正増補し萃を抜き精を蒐め更らに附録として「家訓」の法語を加ふ禪師一度び口を開くや霹靂たる雷霆の叱咤するが如く股々たる洪鐘の轟鳴するが如く對機の心膽を寒からしめずんば止まず時に切實なる活説法あり時に無邪氣なる懷舊談あり、一度び本書を繰らんか禪師の聲咳彷彿として紙上に活躍せり若し夫れ禪師獨特の三十棒に至りては偽善と薄信の現代學者を罵倒し盡くして完膚無からしめ覺えず快哉を叫ばしむ。

發行所 京都 中外日報社 出版部
京都市油小路御前通上 振替口座 四二二一三 興教書院

無盡燈

(定價) 一部 十錢 半年 五十五錢
一ヶ月 一圓 郵税不要

▲第十二卷第二號要目▲

宗教的人格と文明の根抵……………本誌記者 旭

佛教地獄論……………赤沼智善 川

▲淨土教別の發展……………安井廣慶 慶

▲迷路……………多田鼎 鼎

先德餘香……………南條文雄 雄

▲寒宵吟……………夜濤等 等

明惠上人の詞藻……………和田龍造 造

▲深庵評論……………田龍造 造

佛教極樂論……………坂井習學 學

▲綱島梁川君に與ふ……………立 外

支那佛教と地理的影響……………稻葉圓成 成

發行所 東京 興教書院 無盡燈社
眞宗大學 (振替口座 四二六八)

馬酔木

(毎月一回發行) 定價(一部拾貳錢 郵税五厘)

第四卷第壹號要目 (三月發行)

- ▲一國の元氣を現顯せる歌ありや……………左 眞夫
- ▲病中吟(長詩)……………左 眞夫
- ▲病中雜咏(短歌)……………同 眞夫
- ▲錯雜日鈔(寫生文)……………長 塚村
- ▲瀛の冬(寫生文)……………同 眞夫
- ▲唯氷行(短歌)……………同 眞夫
- ▲丁未歲旦之頌(短歌)……………左 眞夫
- ▲峽中所觀(短歌)……………同 眞夫
- ▲石盤(寫生文)……………無 花
- ▲繪葉書(寫生文)……………望 月
- ▲背龍寺(寫生文)……………平 福
- ▲不折山人と語る……………左 千
- ▲紅葉狩(紀行文)……………志 都
- ▲選歌五拾首……………節 夫
- ▲選歌三十八首……………左 眞夫
- ▲温情歌……………同 眞夫

本誌は不折畫伯の特に本誌の爲めに寄せられたる彩色密畫二葉を挿繪とせり

發行所 東京本所茅 根岸短歌會
三丁目

第二回豫約大募集

●佛教に關する知識の無盡藏也●
文學博士村上專精先生監修 法藏館編纂局編輯

輕便新裝

佛教百科寶典

製本
全五號活字振假名付
總布クロス背表金文字入
堅牢洋綴美裝一千頁内外

豫約●定價金壹圓二拾錢 郵稅拾錢 ●豫約價金七拾錢 郵稅拾錢
方法●豫約期限四月中 ●期限經過後は定價に復す ●前金に非ざれば豫約
と見做さず ●製本五月上旬より着金順により送本

- 内容の書本
- ▲教義 佛教各宗の教理の安心
 - ▲傳記 釋尊初め和漢高僧の傳記 逸話を悉く網羅す
 - ▲詩歌 佛敎の歌へる古今の高僧名家の漢詩及び和歌
 - ▲統計 寺院、僧侶、信徒、其他年代等に關する統計表
 - ▲法相 佛教徒の是非心得おくべき名目法數何れも既明す
 - ▲故實 佛傳佛具堂塔莊嚴等の起源來歴數百題
 - ▲金言 佛の語とすべき佛祖の金言聖訓を集む
 - ▲歴史 印度支那日本昔から佛法の傳來せる諸事詳載
 - ▲警諭 因縁面白く有益なのは悉く集めてある
 - ▲古蹟 名高き佛敎の名所聖蹟を網羅す

特色

- ◎第一 一切網羅何もかも無
- ◎第二 便利重寶 習くも見か
- ◎第三 平易明白 誰でも讀め
- ◎第四 説明 斬新 讀めば直に
- ◎第五 索引自在 知りた
- ◎第六 一部持ては佛教に關する萬事萬端知ら
- ◎第七 終生 他人に問ふに及ばず
- ◎第八 赤面 なくす
- ◎第九 一讀 面白く且
- ◎第十 有益 なる佛敎
- ◎第十一 エンサイクロ
- ◎第十二 ペチア也

●博士百人を雇ふに勝れるは本書也●

近角常觀著(第八版)

信仰之餘瀝

定價拾五錢 郵稅貳錢

近角常觀著(求道秋季號)

人生と信仰

定價貳拾錢 郵稅壹錢

近角常觀校訂

冠頭 歎異抄

一册郵稅共七錢 (定價五錢郵稅二錢) 但三册までは郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區 森川町一番地

求道發行所

近角常觀著(第三版)

懺悔錄

定價貳拾錢 郵稅貳錢

發行所

東京市本郷區 森川町一番地

求道發行所

規定

- 一、本誌は毎月一回發行とす
- 一、本誌は一切前金にあらざれば御注文に應ぜず
- 一、本誌代金は必ず小爲替にて送附の事
- 一、但郵券代用の節は五厘切手にて一割増の事
- 一、本誌の購讀者は住所姓名を詳細に楷書にて申送らるべく、轉居の節は新舊兩所の宿所通知する事
- 一、回答を要せらるゝ方は相當の返信料を添ふべき事
- 一、本誌定價左の如し

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	郵稅一册
金拾錢	金拾錢	金六拾錢	金壹圓拾錢	に付五厘

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

- 一、爲替振込局は「本郷森川町郵便貯金爲替取扱所」宛の事
- 一、爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地求道發行所」とせらるべし

明治四十年三月二十三日印刷
明治四十年三月二十八日發行

發行所 東京市本郷區 森川町一番地
發行兼編輯人 近角常觀
印刷人 自土幸力

大賣捌所 東京市神田區 神保町 東京堂

前號要目

求道

◎他力の眞髓

感謝

◎年頭感謝◎順境逆境◎佛力現前◎法則之解◎大信海◎驕慢と自暴

講話

◎慚愧心

告白

◎少女の信狀

教誨

◎教誨自誠——信仰か道徳か

講義

◎歎異鈔——第二章

嘆咏

◎人間の活路(長詩)

◎笑ます兒(短歌)

◎悲泣雨涙(同上)

◎影向(長詩)

紹介

◎懺悔錄◎理想之人◎頌榮

時報

◎昨年の求道會◎本年の求道會◎徳風會等

◎母を奉じて磯長の廟に詣づるの記

近角常觀

左千夫

八風

志都兒

甲之

近角常觀

掬月千壽

近角常觀

近角常觀